

北方地域の煙管と喫煙儀礼

宇田川 洋

はじめに

筆者が提唱する北海道を中心とする北方地域の「アイヌ考古学」を考えるためには、種々のアプローチのしかたがある。その一つとして物質文化史学的方法があるが、それを実践するために、以前に、考古学上のアイヌ文化に属する軽石製火皿 *kamuy-ape-o-p* について考察を加えたことがある（宇田川 1979）。今回はそれと密接な関係にある煙管（烟管・キセル・キセリ）の北方地域における考古学上あるいは民族学上の資料を検討することにする。さらに、北方諸族の喫煙儀礼についても考えてみることにする。

この点については、馬場脩の古典的研究がある（馬場 1942, BABA 1949）。サハリン（樺太）および北クリール（千島）出土の煙管を紹介しつつ、煙草の移入の問題をとりあげたり、アイヌ社会の喫煙に伴う諸道具や喫煙儀礼を紹介している。

本論では、この考古学上の遺物としての馬場紹介のものに、その後の追加資料を集成し、さらにいわゆる民族資料も代表的なものを紹介し、そして北方諸族の煙草および喫煙儀礼に関する民族誌

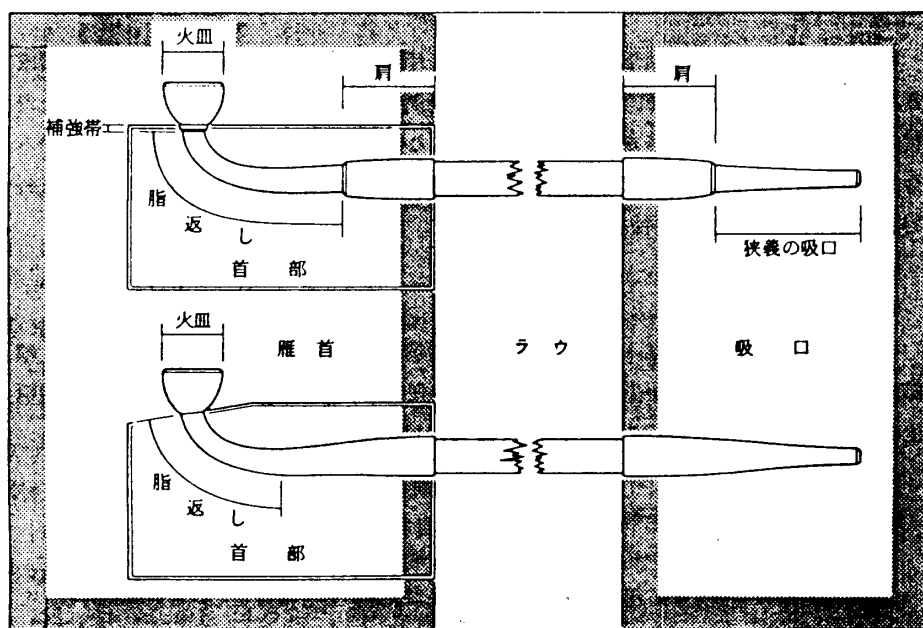


図1 煙管の名称（古泉1985aより）

的記載を行うつもりである。ただし、真鍮製や青銅製などの金属製の煙管は最低必要範囲内の紹介に留め、石製・土製・木製などのより古い形式のものを重点的に扱いたい。なお、図1に煙管の各部名称を示しておいた。また、引用文中の〔 〕内は筆者の注である。

本論を草するに当たり河野本道・大貫静夫・野沢緯三男氏にご教示を得た。深謝する次第である。

1 北海道出土の石製煙管

資料1（図2—1） 常呂町常呂川西岸堅穴出土の石製煙管の雁首部である（大野 1899：62，図4—1）。河野広道もこれを再録紹介しているが、それによると長さ3.7cm，火皿の外径1.7cmで文様がなく基部が少し厚くなっているとされる（河野 1961）。当遺跡は常呂堅穴群遺跡（史跡常呂遺跡の一部）を指すと考えられるが、堅穴埋土の出土品のようなのである。

資料2（図2—2） 礼文町船泊オションナイ付近出土の石製雁首部である（代田 1890：270）。長さ6.7cm，火皿の外径1.7cmで文様はない。ラウ部にサビタ（ノリウツギ）？の枯朽したものがついていたという。やはり河野が紹介している。このノリウツギについては後述する。

資料3（図2—3） 礼文町重兵衛沢2遺跡第1貝塚出土の泥岩製の雁首部である（松谷 1986：24，図12—30）。火皿の外径は1.76×1.6cm，内径1.1×1.0cmで，全体の長さ4.6cm，高さ2.2cmである。煤状の黑色付着物がついており，あきらかに使用されたものらしい。

資料4（図2—4） 資料3と共伴したものである（松谷 1986：24，図12—31）。泥岩製。孔径の大きいほうが火皿と考えられ，小さいほうはラウに接続する部分とされる。火皿の外径2.0cm，内径1.2cm，高さは4.7cmを測る。特殊形態といえる。

以上の資料3・4とともに金属製のギセルも1点出土している。真鍮製の雁首部であり，古泉弘による分類で18世紀前半のものとされている（古泉 1985b）。また，この第1貝塚からはキテ（回転式銚頭）が10点出土している。さらに同遺跡第2貝塚では，17世紀後半とされる真鍮製ギセルの雁首が出土している。

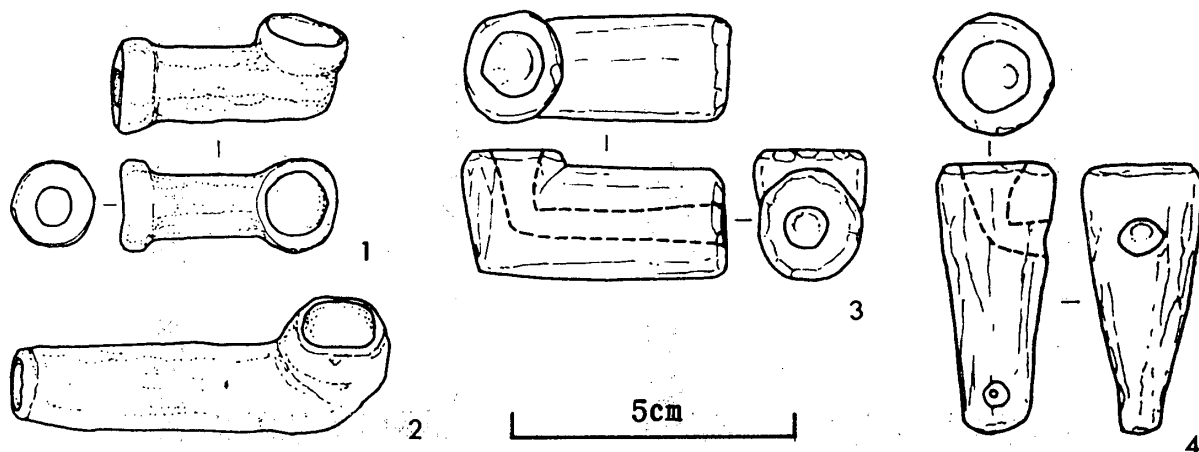


図2 北海道出土の石製煙管

2 サハリン出土の石製煙管など

資料5 (図3-1) 南サハリンの東海岸コルサコフスキー区 (旧大泊郡) のスヴァボドヌィ岬 (愛郎岬) 出土の石製煙管である (新岡 1941: 再録96, 図5-2)。雁首部らしいが, 火皿部が欠損している。スケールは不明。

資料6 (図3-2) ポロナイスキー区 (敷香郡) プロムィスロヴォーエ (東多来加) 遺跡5号 竪穴出土の石製煙管である (馬場 1942: 24, 図1)。雁首部であるが, ラウ部に接続する部分はやや細くなり, 一部が残っている。長さ約 6 cm。ところどころに金箔の痕跡を残すとされる。火皿

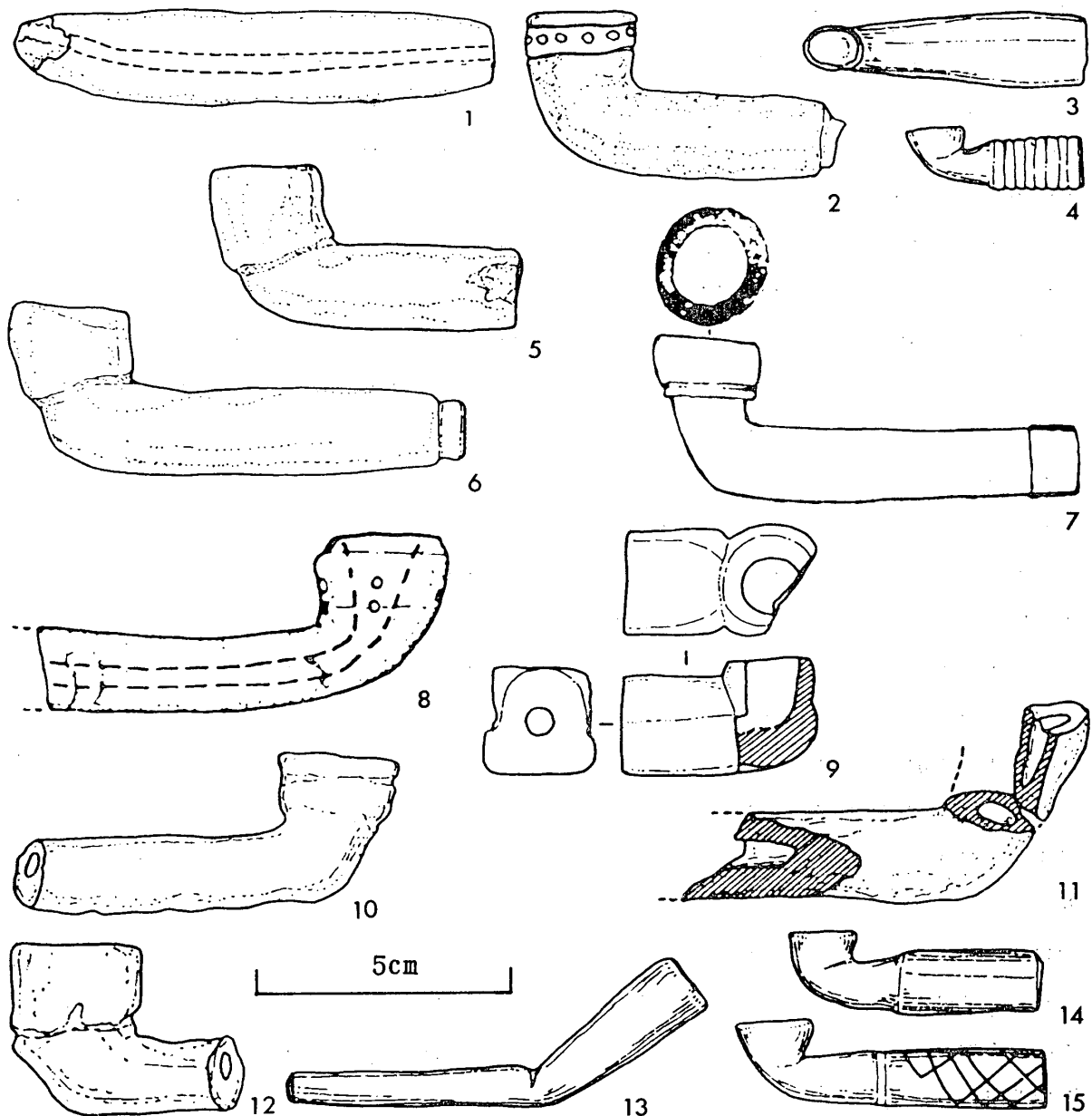


図3 サハリン出土の石製煙管など

上端には刻線と列点がみられる。

資料7 (図3-3) 資料6と同じ堅穴出土の銅製煙管である (馬場 1940: 103, 図49-7)。先端が細みになる形態である。次の資料8とともに江戸時代中期以降の日本製品といわれ、軽石製火皿 (ウンジヲマツフ=unchi-omap) に共伴したとされる。長さ 5.5cm ほどである。

資料8 (図3-4) 資料6・7と同じ出土状況である (馬場 1942: 24, 図4)。銅製煙管で、長さ 3.5cm 弱である。ラウ部にとりつく部分が肩付のようにも思える。

資料9 (図3-5) 東海岸のドーリンスキー (落合) 区スタロドッフスコエ (栄浜) 出土の石製煙管である (馬場 1942: 24, 図2)。雁首部であるが、同じくらいの太さの火皿部をひとつの段によって作出している。長さ 6cm である。

資料10 (図3-6) クリリオン (西能^の登呂) 半島東海岸のアニフスキー区 (留^る多加^{たか}郡) フヴォストーヴォ (内^{ない}砂) 出土の石製煙管 (馬場 1942: 24, 図3)。前資料と類似した形態であるが、雁首部はやや長く、ラウ部に接続する部分が細く作出されている。長さは 9cm 弱である。

資料11 (図3-7) サハリン出土の石製煙管である (宇田川校註 1983: 96, 図45)。くわしい出土地点は不明であるが、「石煙管 一, 全長二寸七分 一, 吸口径八分 一, 胴径九分五厘」とされている。雁首は明瞭に作りだされており、ラウ部に接続する部分は肩付のようである。

資料12 (図3-8) 東海岸のコルサコフスキー (大泊) 区オホーツコエ (富^{とんない}内) 村出土の石製煙管である (新岡 1974: 323, 図4-5)。旧樺太庁博物館職員菅原憲光氏の発掘品で、博物館所蔵とされる。1936年5月13日発掘という。堅穴からの出土品で、内耳土器や真鍮製煙管なども出土しているが、それらはアイヌ文化期のものと考えてよい。雁首部に二段の円形文様がめぐらされているようである。

なお、資料6・9・10のような石製煙管について、馬場脩は次のようにいう。「石製雁首の原料は灰色を呈する極めて軟い石質のものでマキリ (小刀) を以て削って作る……此の原石の良質の物は西海岸の登富津 (トゥフツ) の川口に産するものである」 (馬場 1942: 22) と。なお、この登富津はホルムスキー区 (旧真岡郡) チェーホフ (野田) の南方約 5km の地点に位置している。

資料13 (図3-9) ドーリンスキー区スタロドッフスコエ村のナィブチ I 遺跡14号堅穴の上層住居址出土の土製煙管である (СТЕШЕНКО 1979: 169, 図94-1)。100~200年前のアイヌ期のものとされる。下層の堅穴住居址は、刻文・型押文のオホーツク式土器を伴うものである。雁首部を残すが、長さは 3.8cm を測る。火皿部はくびれで表現されているが、高さはきわめて低いものである。

資料14 (図3-10) アニワ湾東部のコルサコフスキー区アジョルスキー (長浜) 付近のアジョールスク I 遺跡5号堅穴の上層出土の土製煙管である (ШУБИН 1979: 77, 図4-3)。雁首部であるが、火皿部はやや大きく表現されている。残存部の長さは 7.5cm ほどである。なおこの遺跡の上層遺構は、北海道アイヌの場合と同じように、送り場遺跡の一種と考えられるものである。

資料15 (図3-11) 資料14と同じところで出土している土製煙管の雁首部である (ШУБИН

1979: 77, 図4—4)。火皿部は一部欠損しているが、やや背が高かった感じがある。残存部の全体の長さは8cmほどである。

資料16(図3—12) これも資料14・15とともに出土の土製煙管の雁首の部分である(ШУБИН 1979: 77, 図4—5)。火皿部は資料9・10に類似し、一つの段をもって成形されているが、より直角に近く立ちあがっている。しかも雁首より太く作られている。長さは4cm強と思われる。アジョールスクI遺跡5号堅穴上層では、以上の3点の土製煙管とともに金属製煙管も3点出土している。以下にそれを見ておく。

資料17(図3—13) 途中で折れ曲がっているが煙管の吸口部である(ШУБИН 1979: 77, 図4—8)。全体の長さは6.8cmほどであろう。

資料18(図3—14) 金属製煙管の雁首部である(ШУБИН 1979: 77, 図4—7)。火皿部にいたる脂返しの部分は少し細く作られている。ラウ部にとりつく部分が肩付のようにも思えるが、火皿と首部の接合部には補強帯がないようである。そのことは前の資料8にもいえることである。長さ5cmである。

資料19(図3—15) 金属製煙管の雁首部である(ШУБИН 1979: 77, 図4—6)。肩に相当する部分には線刻文がみられる。脂返しは直線的である。長さ6cmほどである。以上のアジョールスクI遺跡5号堅穴上層の6点は、内耳土器を伴うアイヌ期のものらしく、17~19世紀の年代が考えられている。

資料20 同じくアジョールスク遺跡の6号堅穴上層から土製煙管が1点出土している(ШУБИН 1979)。やはりアイヌ期のものだろうが、15~19世紀という幅のある年代が与えられている。

資料21(図4上) 旧豊栄郡白縫村保呂にある堅穴出土の石製煙管の雁首部のラウ側もしくは吸口部である(1931年玉貫光一氏採集, 河野広道コレクション=旭川郷土博物館所蔵, 1964年に宇田川撮影)。1条の細い線刻がめぐっている。写真の右端は欠損している。残存部の長さは3.6cm, 太さ1.4cmである。

資料22(図4中) これも旧豊栄郡白縫村保呂の堅穴出土の石製煙管の雁首部のラウ側もしくは吸口部である(河野広道コレクション=旭川

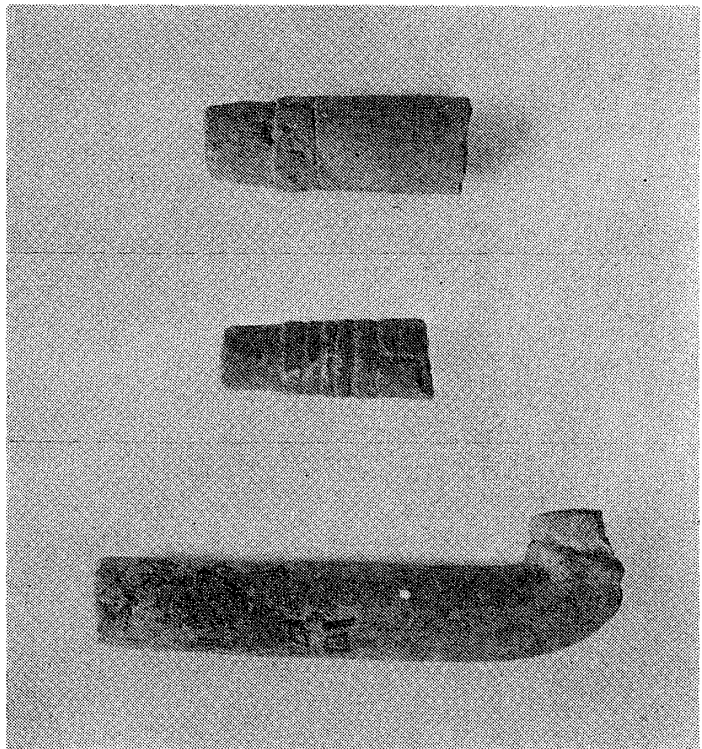


図4 サハリン出土の石製煙管

郷土博物館所蔵、同)。5条の線刻がみられる。やはり欠損品であるが、現存の長さは2.9cm、口径1.2×1.1cmである。

資料23(図4下) 資料21・22と同じ堅穴出土の石製煙管の雁首部である(河野広道コレクション=旭川郷土博物館所蔵、同)。火皿の一部を欠くが、横位に1条の刻線がめぐらされている。長さ7.2cm、火皿の推定径1.8cm、ラウ側の太さ1.3×1.2cmを測る。

資料24 サハリン西海岸の旧本斗郡本斗町大字遠節字良音間神社貝塚出土の石製煙管(木村 1934)。オホーツク式系刻文・無文土器のほかにはガラス玉・鉄刀・人骨などが出土しているので、その時期のアイヌ期のものと考えられる。

資料25 旧本斗郡本斗町大字遠節字遠節沢の俗称水源池の沢出土の石製煙管(木村 1934)。骨塚遺跡であり、オホーツク式系型押文・刻文・浮文・無文土器や各種の石器、骨角器などが出土している。

資料26 西海岸のネヴェリスキー区(本斗郡)ゴルノザヴォードゥスク(内幌)貝塚出土の石製煙管(木村 1934)。オホーツク式系刻文・無文土器や石器、骨製品も出土している。

資料27 ネヴェリスキー区クズネツォーヴォ(宗仁)付近の宗仁沢出土の石製煙管である(木村 1934)。オホーツク式系刻文・無文土器や各種石器、骨製品なども出土している。

資料28 西海岸の旧本斗郡好仁村大字白主北白主出土の石製煙管(大坊 1926)。石斧・石鏃のほか、ガラス玉、人骨も出土したといわれ、アイヌ期に属するものと考えられる。

資料29 同じく旧本斗郡好仁村 大字白主字北白主のホレー川堅穴遺跡出土の石製煙管(大坊 1926)。厚手土器、石斧のほかには日本刀とその附属品、人骨が出土しているので、アイヌ期に属すると思われる。

資料30 旧本斗郡好仁村大字白主字南白主の白主寺遺跡出土の石製煙管。縄目文、オホーツク式系刻文・無文土器、各種石器、コハク玉、ガラス玉、人骨なども出土。アイヌ期か。

資料31 コルサコフスキー区スヴァボードノエ遺跡の墓出土の煙管(ГОЛУБЕВ 1973)。土器、ビーズ、青銅製留金、織物片、人骨とともに出土。アイヌ期であろう。

資料32 ドーリンスキー区ナィブチⅠ遺跡出土の土製煙管(СТЕШЕНКО 1979)。アイヌ文化期とされる。

資料33 旧大泊郡遠淵村二号沢チャン跡遺跡出土の石製煙管(新岡 1966)。人骨、鉄刀、ガラス玉とともに出土している。そして「石製煙管は樺太全島一特に西海岸に多く出土するものの如く、亜庭湾沿岸では長浜に多い」とされる。

以上、南サハリンにおける石製・土製・金属製煙管の考古資料を紹介してみた。このほか新岡武彦ノート(『遺跡調査野帳』)に、石製煙管の出土地として、栄浜、本斗、東長浜、荒栗、十串があげられている。栄浜は本論の資料9、本斗は資料24もしくは25に相当するであろうか。形態は不明であるが、東長浜(旧大泊郡長浜村大字長浜字東長浜)出土例を資料34、荒栗(同大字荒栗字荒栗)例を資料35、十串(旧本斗郡好仁村大字十串字十串)例を資料36と呼んでおく。

次に、クリール列島における考古資料をみておくことにする。

3 クリール出土の各種煙管

資料37(図5-1) シュムシュ(占守)^{べつとぶ}島別飛2号堅穴出土の石製煙管である(馬場 1942: 24, 図6)。軟石製。長さ4.5cm。雁首部であるが、側面に花火状の刻み文様がみられる。荒削りのままであるが、ヨーロッパ物のマドロスパイプを模して作られたものとされる。

資料38(図5-2) シュムシュ島片岡の堅穴遺跡から出土した骨製煙管(馬場 1942: 24, 図5)。長さ5cmほどの雁首部である。「純然たるマドロスパイプの模倣品で、大分使用されたものと見えて、雁首の周囲に黒脂が付着されている」(p.24)といわれる。

資料39(図5-3) シュムシュ島別飛4号堅穴出土の陶製煙管の雁首部(馬場 1942: 27, 図7)。ヨーロッパのパイプで火皿に刻線文様がみられ、英語でCorkと印が刻まれているとされる。英国製か米国製と思われるといわれる。長さ5cm弱である。

資料40 シュムシュ島別飛8号堅穴出土の銅製煙管である(馬場 1936)。首がとれたものとされるので、ラウと吸口部あるいは火皿がとれた雁首部であろう。アイヌ期に属する。

資料41(図5-4) パラムシル(幌筵)^{かばり}島樺里貝塚出土の真鍮製煙管の吸口部である(馬場 1942: 24, 図8)。肩付きでその部分に彫刻が施されている。雁首との接続部分が螺旋の雄ネジとなっているもので中国製とみなされている。江戸時代中期から末期とされる。

資料42(図5-5) ウルupp(得撫)島クリロロシア集落址出土の骨製煙管である(シェービン 1990: 105, 図9-10)。これもいわゆるマドロスパイプの雁首部であり、火皿部に人面を表現している。長さ5cmほどである。1795~1805年居住のロシア人の残したものとされる。

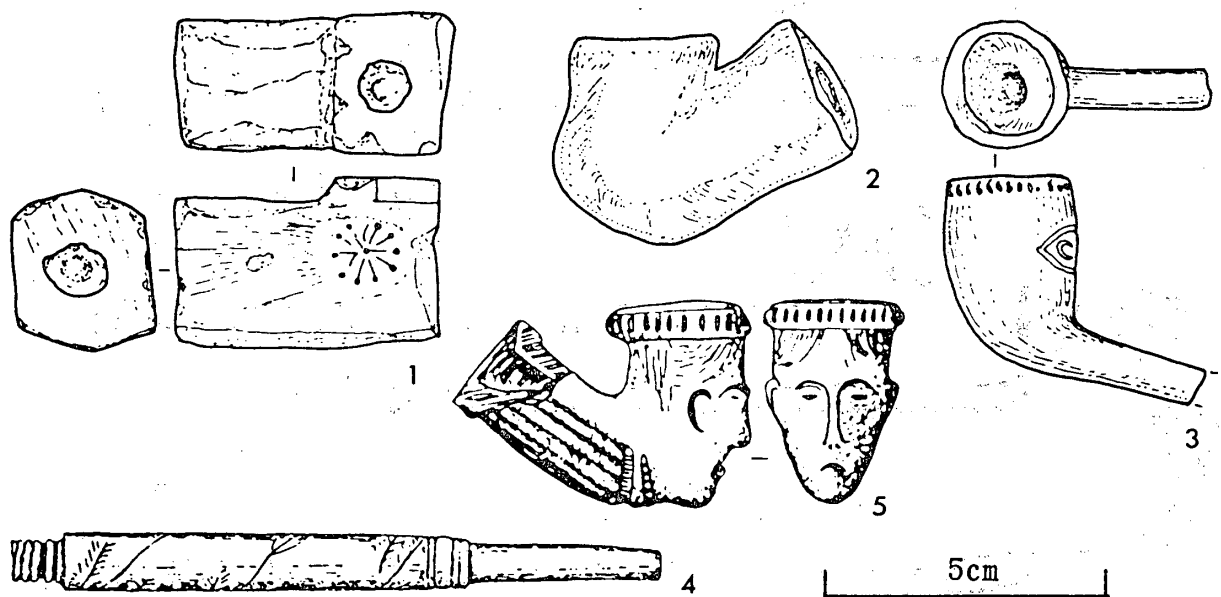


図5 クリール出土の各種煙管

4 シベリア各地出土の煙管

資料43(図6-1) ハバロフスク地方ハバロフスク市の15kmほど下流のトゥングースカ川口墓址1号墓出土の石製煙管の肩付き吸口部である(МЕДВЕДЕВ 1979:196, 図2-3)。玉髓製で、長さ6cmほどである。20世紀初頭のナナイ族のものといわれる。

資料44(図6-2) 前資料43と同じ遺跡の2号墓出土の石製・骨製・青銅製煙管の完形品である(МЕДВЕДЕВ 1979:196, 図2-4)。吸口部は肩付きであり玉髓製。魚の彫刻がみられる。ラウ部は骨製とされる。雁首部はやはり肩付きとなっており、青銅製である。火皿部は大型である。長さ19cmほどである。前資料とともに吸口の末端部が太く作られるという特徴をもっている。やはり20世紀初頭のナナイ族のものといわれる。

資料45(図6-3) ノヴォシビルスク州クィシェトフカ区中央(オビ川支流のイルティシ川に注ぐタラ川右岸)のクィシェトフカ墓址15号クルガン出土の青銅製煙管である(МОЛОДИН 1979:100, 図31-1)。雁首部付近が残っているが、ラウ部と吸口部も一体のものと思われる。火皿と首の接合部には補強帯がつけられている。残存部の長さ13cmである。17世紀末から18世紀初頭のものとされる。

資料46(図6-4) 前の資料45と同じ遺跡で、100号クルガン出土の青銅製煙管である(МОЛОДИН 1979:100, 図31-2)。前資料と酷似する形態である。残存部の長さ12cm。同じく17世紀末から18世紀初頭のものとされる。

なお、資料45・46に類するものは、東シベリア地方にも特徴的にみられるともいわれる。さらに

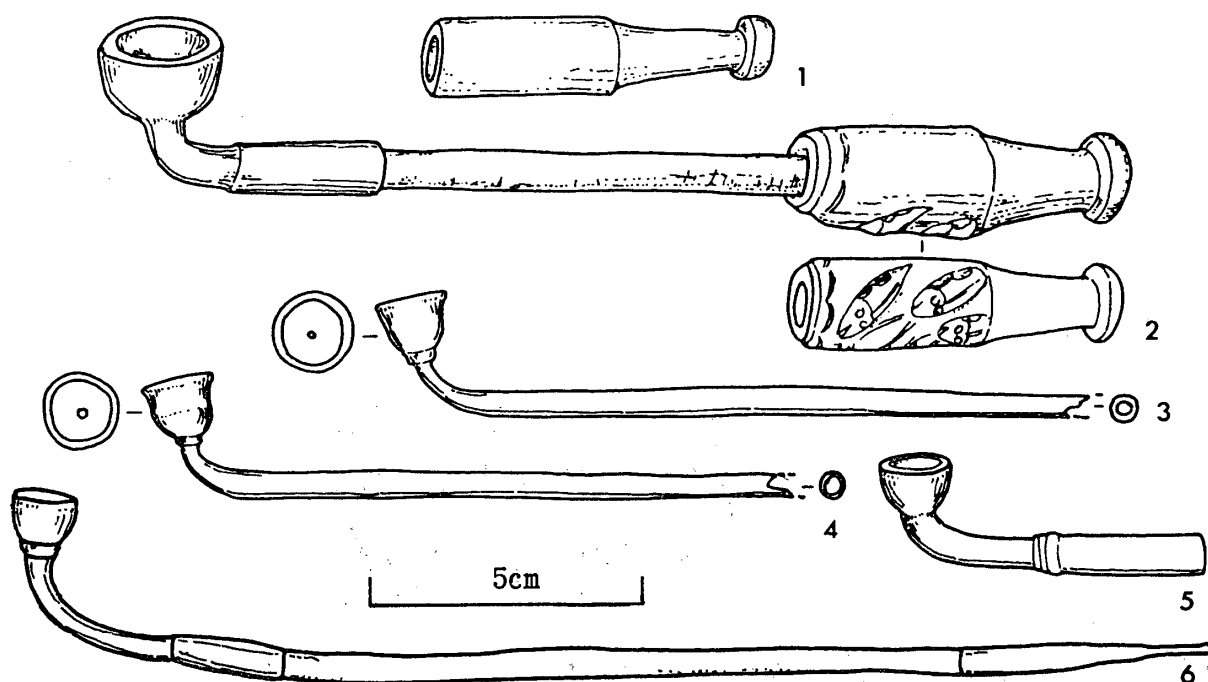


図6 シベリア各地出土の煙管

トゥヴァ共和国にもみられ、西シベリアのセリクープ族（旧称オスチャーク・サモイェード）、チュリムスク・タタール族にもみられるとされる（МОЛОДИН 1979：99）。

資料47（図6—5） バイカル湖オリホン島にあるデレントゥィ・ダバン墓址4号墓出土の青銅製煙管の雁首部である（АСЕЕВ 1974：113，図3—7）。首部は肩付きである。縮尺不明。17～18世紀のブリャート文化のものとされる。

資料48（図6—6） 東シベリアのエニセイ川上流のウユク川上流のトゥヴァ自治共和国にあるモングン・ティガ墓址から出土した金属製煙管である（ДЪЯКОНОВА 1975：27）。完形品であり、縮尺は不明であるが20cmを超えるものと思われる。雁首部と吸口部は金属製とされる。ラウ部は不明であるが、骨製の可能性がある。雁首は肩付きで、火皿と首の接合部には補強帯がめぐるようである。18～19世紀のトゥヴァ族（旧名称トファラル）の残したものとされる。

ちなみに中国東北部においては、黒龍江省で清代の墓が発掘されており、銅製の烟袋（煙管）が報告されている。その一つは依蘭県永和村の徳豊墓のものである（史学謙・金太順 1982）。全部で5点あるらしいが、M4墓の例は雁首（烟鍋）と吸口（烟咀）が銅製で、ラウ（烟杆）は木製である。別の例は、齊齊哈爾市梅里斯音欽墓から出土しているものである（崔福来・辛建 1989）。烟嘴（吸口）と烟鍋が各1点あるという。

5 北海道アイヌの民族資料

以上、北海道・サハリン・クリールさらにシベリア各地ほかの考古学上の発掘資料の代表的な例を概観してきた。次にいわゆる民族資料といわれる煙管についてみておくことにする。まず、北海道の古記録に表現されたものからみていこう。

『十勝日誌』（松浦武四郎，1858・安政5年）に描かれた石製煙管は、図7—1に示したものである。太い石製の雁首部と材質不明のラウ部が写實的に表現されている。そして「石烟管 是は今にても山中にては用ゆ 北蝦夷の東岸にても胡女は惣て是を用ゆ」と説明される。つまり、北海道の（交易のいき届かない）山中で用いられているが、サハリンの東海岸でもサハリンアイヌの女性はすべてこれを用いていたとされるのである。河野広道も紹介している（河野 1961：51）。

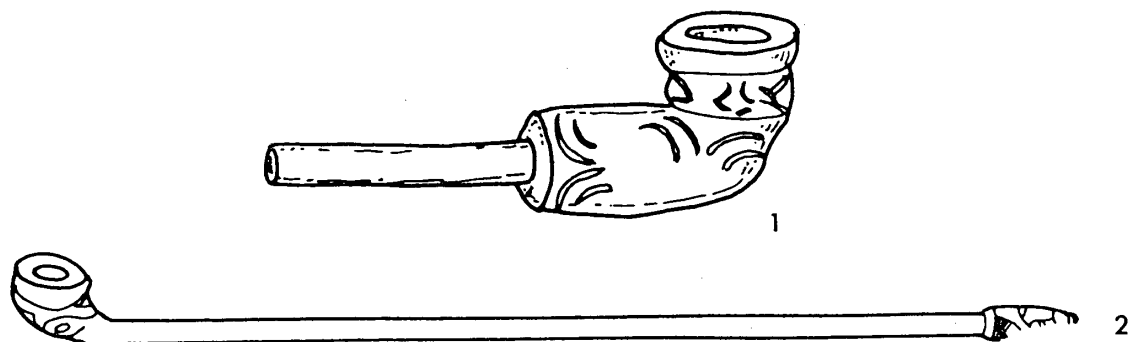


図7 北海道アイヌの煙管図

『天塩日誌』（松浦武四郎，1857・安政4年）にみられるものは木製煙管である（図7-2）。全体像が描かれ、「木煙管ニイキセル 木にて作りし煙管也 当山中土人好て用ゆる也 また北蝦夷地に多し」と説明される。やはり山中で用いられるとされ、サハリンにも多いことがいわれる。

『蝦夷生計図説 トイタの部（上）ムンカルの図』（村上貞助，秦憶丸撰・間宮倫宗増補，1823・文政6年）には喫煙している男のアイヌが描かれている（図8）。それによると，吸口部は不明であるが雁首部の様子から金属製の煙管のように思われる。



図8 北海道アイヌの喫煙図

オランダのライデン国立民族学博物館所蔵の資料も古い年代を示すものである（クライナー1988）。それは Ph. Fr. v. シーボルトが紹介したもので，最上徳内をはじめ日本の友人からアイヌ民具を入手しており，その年代観から18世紀末から19世紀初頭と考えられる。1832～51年刊行の“Nippon”第7巻（p. 348，図19-8）にみえるものであるが，大型の火皿部をもつ金属製煙管である。古泉分類の第2段階（17世紀前半）に属するもののようである（古泉1985b）。同時に煙草入れと煙管差し（ケース）も写真紹介されている。そして次のようにいわれる。「パイプは日本や中国のものに似ており，同様に小さい金属の，そしてしばしば瑠瑯（エナメル）で飾られた頭と吸口をもっており，これを一本の管でつなぐ……。男子用のパイプはたいてい山丹（黒竜江地方）からきたもので，タヤイ Tajai と名づけられる。婦人用のものは木製のものが多く，セレンボ Selenpo ……とよばれる」（妹尾訳1979）。また未見であるが，明治時代に描かれた『蝦夷風俗図 三部』にも煙管と煙草入れの図があるといわれる（高倉1966）。

以上が，19世紀前半から中半ころの煙管に関する記録である。次に19世紀後半から20世紀前半の比較的古い民族資料をみていこう。

図9-1 木製煙管でサビタ（ノリウツギ）製。吸口から首部までほぼストレートな形状で，火皿部がわずかに立ちあがる形態をとる（犀川会編1933：PL. 71-8）。

図9-2 これもサビタ製の木製煙管。吸口部を太くして彫刻を施している（犀川会編1933：PL. 71-7）。前資料より大型であるが，縮尺は不明。

図9-3 頭部が石製の煙管とされるものである。つまり雁首部が石製という意味であろう。ラ

北方地域の煙管と喫煙儀礼



図9 北海道アイヌの煙管および喫煙図

ウと吸口は別の材質らしいが不明である（犀川会編 1933：P L. 71—6）。

図9—4～6 R. ヒッチコック紹介の木製煙管である（ヒッチコック 1985：113，図14）。4・5のラウ部には彫刻が施されており，5・6の吸口部は太く作られ，肩を表現している。その部分にはやはり彫刻文様がみえる。竹製の短い別の吸口がついているという。これらについては以下の説明がある。「喫煙用具は，非常に簡単な木の煙管と，長くて彫刻を施してある木製の煙管差しに紐でもってとりつけてある，同じく木製の煙草容れとから成っているが，その煙管差しは，帯にさし込まれるようだ。……煙管は，竹製の短い吸い口のついたものと，つかないものがあるらしい」（p. 113）。この喫煙用具の訳者の注釈がある。「アイヌ人は，自製のセレンボと呼ぶ煙管のほかに北海道南西部のアイヌ人は日本内地風の，火皿（雁首）の狭くてやや深い煙管を，樺太アイヌ人は火皿の広く開いた浅い形の煙管を使用していた事実が知られ，北海道の一部地域にそれぞれ異なった系統のものが伝播していたことも実証されている。また，北千島の千島アイヌ人遺跡からは陶製パイプや石製パイプ等も出土している」（p. 198）とされる。

図9—7 A. S. ランドーが描いた平取アイヌの首長ペンリウクの喫煙の姿である。煙管の説明はないが，その形状から木製のようである。図9—4のタイプに似ており，ラウ部に彫刻がみられる（ランドー 1985：42）。

図9—8 本資料は，十勝地方の足寄アイヌが使用したカムイ・キセリ（kamuy-kiseri）と呼ばれる木製煙管である（知里 1953：130）。長さ 39cm とある。その説明では，クマ送りの際にクマの頭の前に置いてクマの霊に喫煙せしめる二又の煙管をノリウツギの木で作ったとされる。

図10—1 美幌博物館所蔵の木製煙管である（美幌町郷土資料館編 1983：20）。吸口部はやや太くなり，彫刻が施されている。材質は不明である。長さ 30.8cm，太さ 2.4cm とある。

図10—2 これは煙管差しの資料である（美幌町郷土資料館編 1983：20）。木製で彫刻が施されている。左側の穴に煙管の吸口側からさし込んで雁首を固定して用いたらしい。長さ 37.1cm，高さ 2.5cm，幅 3.9cm とある。

図10—3 この資料も参考資料で煙草入れである（美幌町郷土資料館編 1983：20）。木製で，横 10.5cm，縦 6.0cm，高さ 9.6cm である。以上の図10の1～3がワンセットとなる。

図11—1 アイヌ民族博物館所蔵資料の木製煙管である（白老民族文化伝承保存財団編 1989：60，P L. 60430）。材質は不明。長さ 36.7cm。

図11—2 アイヌ民族博物館所蔵の木製煙管（白老民族文化伝承保存財団編 1989：60，P L. 60431）。前資料に似るが，火皿部はやや大型に作られている。材質は不明。長さ 39.3cm。

図11—3 函館博物館所蔵資料の木製煙管である（函館博物館編 1987：189，P L. 2744）。少し曲りのある枝を利用しているが材質は不明。火皿は小型のようである。長さ 29.1cm。

図11—4 函館博物館所蔵の木製煙管である（函館博物館編 1987：190，P L. 2747）。材質は不明であるが，ほぼストレートな枝を利用している。ラウ部に斜めに螺旋状の縞模様がみえる。何かを巻きつけていた痕跡であろうか。長さ 49.7cm。

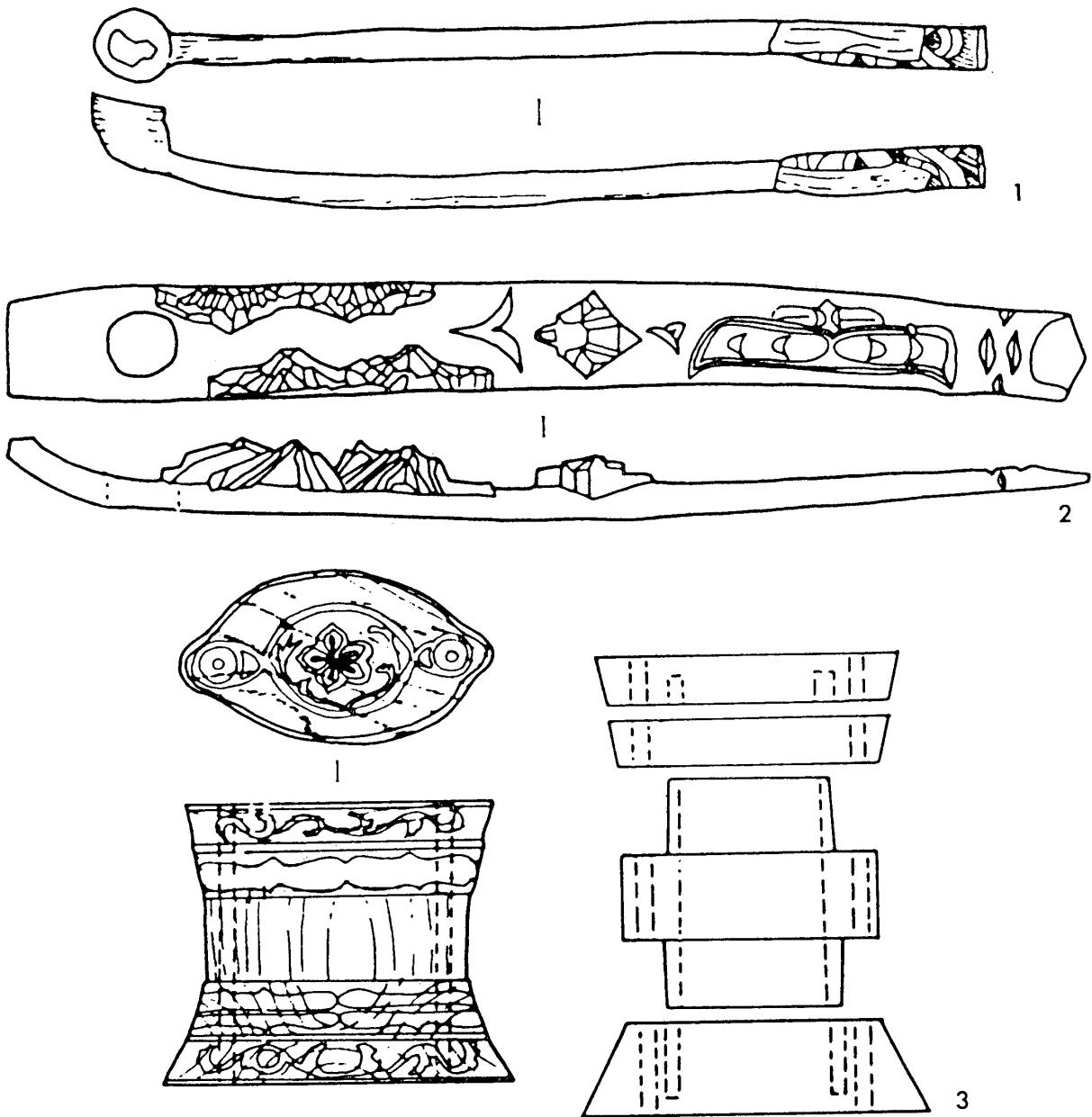


図10 北海道アイヌの煙管・煙管差し・煙草入れ

図11—5 これも函館博物館所蔵の木製煙管である（函館博物館編 1987：190，P L. 2749）。材質は不明。長さ 19.9cm である。

図11—6 日高アイヌの煙管と煙管差しとされる資料である（金田一・杉山 1942：62，図39）。その形状から木製とみなされる。

図11—7 日高アイヌの木製煙管である（金田一・杉山 1942：P L. 47—5）。吸口部と火皿部に彫刻文様がみられる。サビタ（ノリウツギ）製とされ，この材質は中心（髄）が空洞になっていることと，木地面がよいために本州においても古く巻煙草のパイプに利用されてきたといわれる。

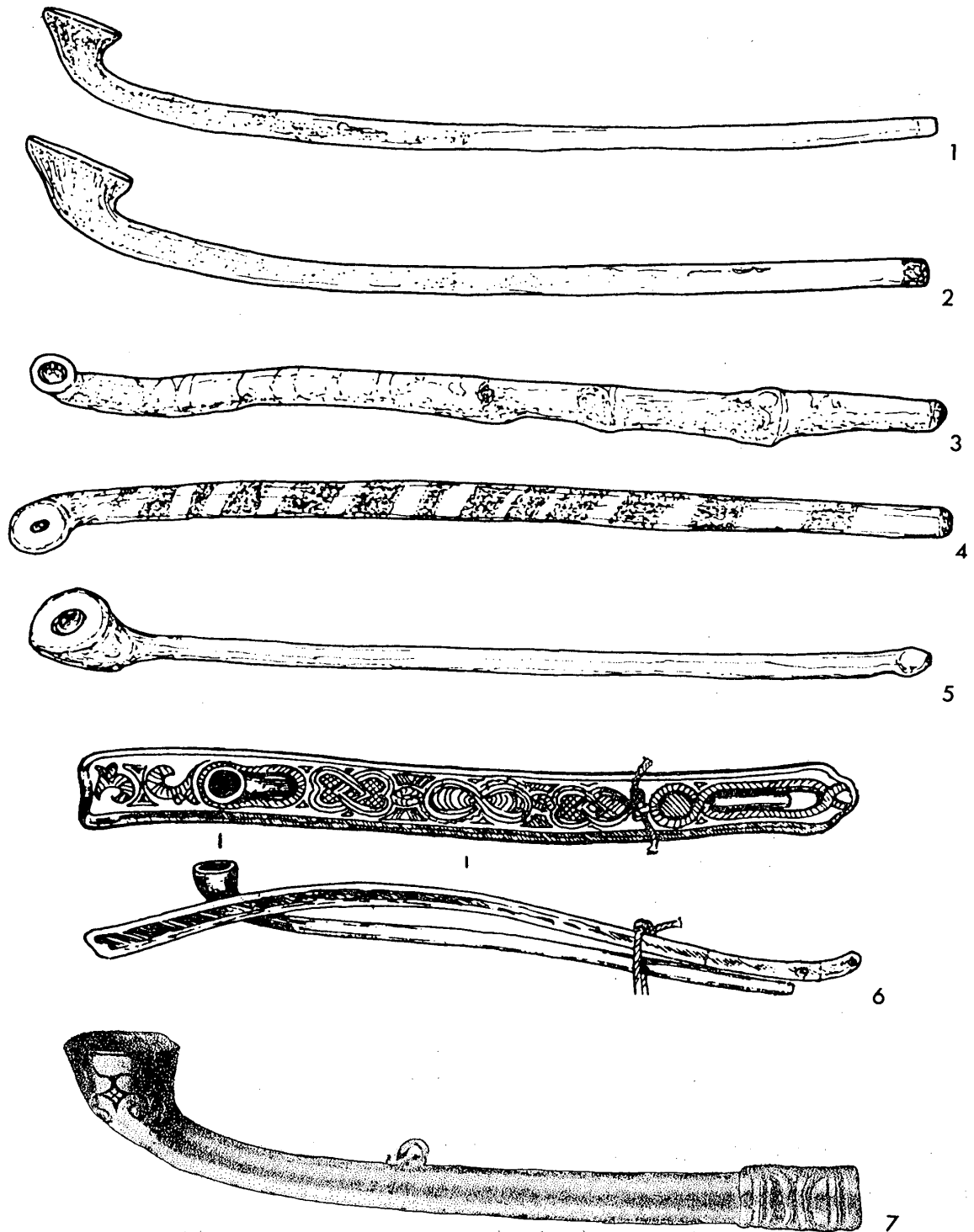


図11 北海道アイヌの木製煙管など

以上、北海道アイヌの煙管のうちいくつかの木製のものをみてきた。もちろん博物館所蔵資料などには金属製煙管もたくさん存在するが、それはここでは省いた。そして、木製煙管の場合の材質はノリウツギの木を利用することが多いようである。そこで、知里真志保によってノリウツギの説明をみておこう（知里 1953：129—130）。

ノリウツギは北海道方言ではサビタともいうが、ユキノシタ科アジサイ属の落葉広葉樹である。低木であるが、幹は太さが 12cm にもなるという。知里によると、アイヌ語ではラスパ (rasupa 檜の柄と穂先を継ぐ棒) あるいはラスパニ (rasupa-ni ラスパを作る木) と呼ばれるのがふつうのようである。サハリンではキンネニ (kin-ne-ni 髓になっている木) あるいはキシリニ (kisiri-ni キセルの木) と呼ぶ。ほかにも呼び方があるが、煙管の材料としては中が髓になっているところが便利な点であったのであろう。

林善茂も「ニキセルは、くびの曲ったさびたの枝でつくった木製の煙管で、現今の煙管よりも皿が大きく、長さも 1 尺 2、3 寸あった。各自の手製品で、明治時代から大正末年頃まで、今の年寄の父親の時代には、盛んに使われた。」(林 1965: 145) と述べている。

ここで更科源蔵の説明を加えておこう (更科 1982: 168—169)。「煙草も酒と同じ本州から持ち込まれた葉煙草がもとのようであるが、石狩川筋や鶴川では河原母子草 (シルシノヤ) の枯葉をすったといい、煙管 (キセル) はのりのきの枝で、セレンボとか木煙管 (ニキセリ) というパイプをつくったが、大陸から入った雁首の大きいものも出土するから、大陸渡来も相当古いようである」。ここに出てくるシルシノヤとは、知里真志保によれば、sirus-noya (岸にあるもみ草) のことでシロヨモギを指すという。アイヌ社会では、ヨモギは火の信仰と結びついて、東方の善神のひとつとされている。火—喫煙という図式の中で興味深い点である。なお、ノリノキとはノリウツギのことである。

6 サハリンアイヌの民族資料

では次に、サハリンアイヌの場合の民族資料をみておく。

図12 『唐太蝦夷地並ニ山丹国事記』 (小田島允武, 1807・文化4年) および『蝦夷拾遺補』 (同, 1812・文化9年) にみえる「唐太キセルノ図」である。図は後者を引用した。「烟管ハヤワラカナル石ヲ彫刻シテコシラエル物也 竹ヲ納ル処真鍮ノ口金ヲカク 其幅二分余 大体吸口ヲ不用ト云」と説明される。竹のラウ部との接合部には「小口真鍮ノ口金輪ヲ納」と付記されている。石製煙管で、ラウには竹を用い、雁首のラウに近いところには真鍮の輪金を巻いていることがわかる。

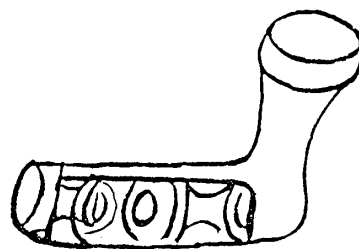


図12 サハリンアイヌの石製煙管
(北海道大学北方資料室蔵『蝦夷拾遺補』より)

図13—1 西海岸のホルムスキー区 (旧真岡郡) カリーニノ (多蘭泊) に最近まで残されていた石製煙管とされるものである (金田一・杉山 1942: P.L. 47—3)。雁首部であるが、底面に口を上に向けて据え置くための文様が施されていると説明される。

図13—2 石製 (木製との説明の部分もある) 煙管の雁首部である (金田一・杉山 1942: P.L. 47—4)。前の資料と同じように、脂返し部の下面に彫刻のある平坦面を作っている。

図13—3 この資料は雁首と吸口が金属製と思われる煙管と木製の煙管差しである (金田一・杉

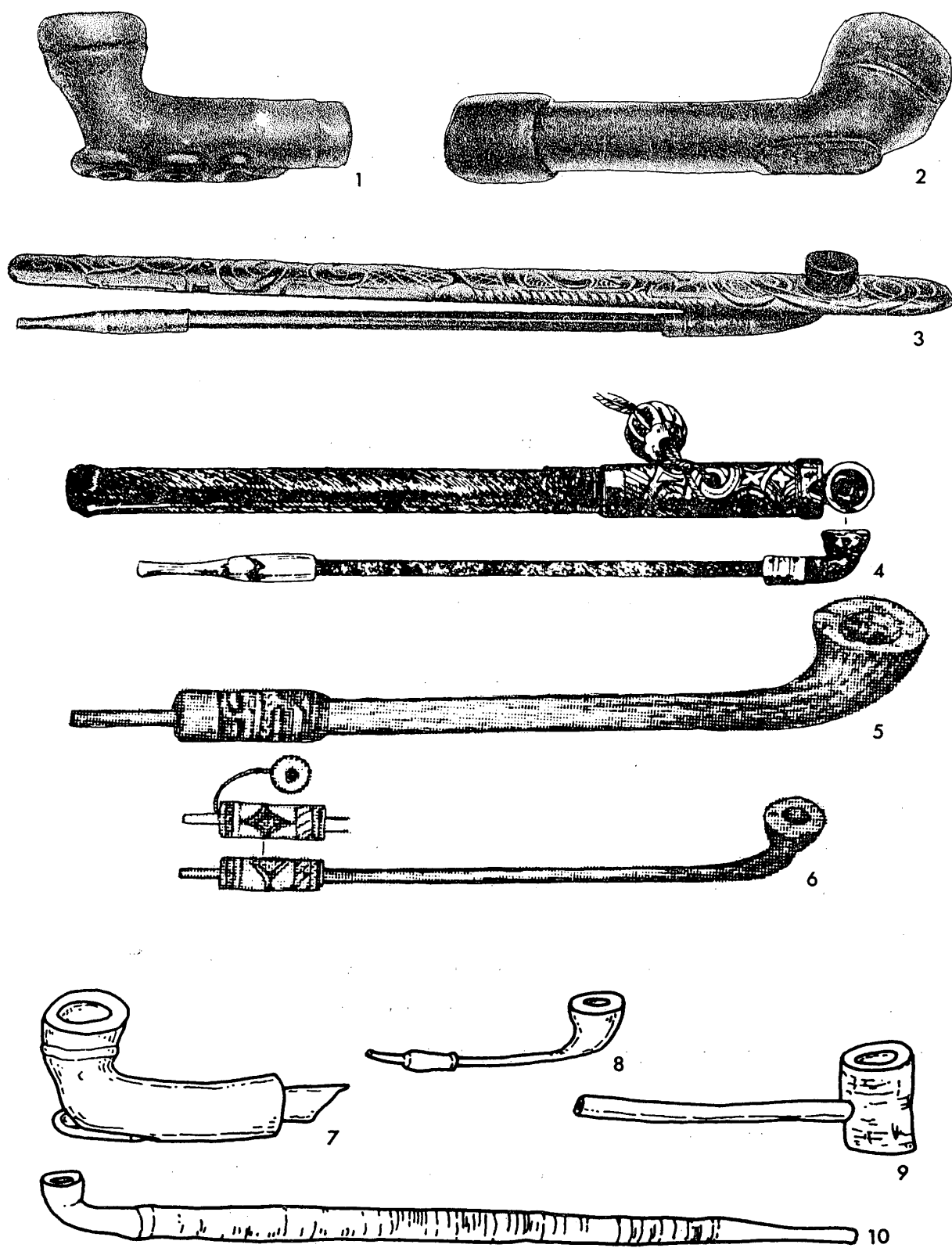


図13 サハリンアイヌの煙管など

山 1942: P L. 47—6)。満州製とされる。

図13—4 石製雁首の煙管と竹製の煙管入れである（金田一・杉山 1942: 62, 図 40）。ラウ部は木製, 吸口部は金属製と思われる。煙管入れの上端部には彫刻がみられる材質不明のものがとりつけられている。

図13—5 サハリン州ユジノ・サハリンスクにある郷土博物館の所蔵資料である（ЛАТЫШЕВ, В. М., ПРОКОФЬЕВ, М. М. 1988: 92, 図 6—2）。Б. О. ピウスツキーが1904年にコルサコフスキー区で採集したものとされる。サンザシの木で作られ, 全長 26.1cm, 高さ 1.6cm, 火皿の径 2.6cm, 吸口部の長さ 4.6cm である。吸口部の肩に当る部分は, 4.2×1.2cm の円筒状のレリーフ彫刻がある竹製（千島笹?）のものが装着されている。

図13—6 同じくユジノ・サハリンスク郷土博物館の所蔵資料（ЛАТЫШЕВ, В. М., ПРОКОФЬЕВ, М. М. 1988: 92, 図 6—1）。同様に, ピウスツキーが1904年にコルサコフスキー区で採集。サンザシ製で全長 20.7cm, 火皿径 1.7cm。前者同様に吸口部には円筒状の 3.6×1.0cm の彫刻のある円筒状のものがみられる。

以上のほかに, 最近の民族資料として山本祐弘が紹介しているものがある（山本 1970: 257, 図 55）。図13—7～10に示した例である。煙管（キセリ kiseri）は, 「自製のもので一寸マドロスパイプ風のものもあり, 日本のキセル風のものもある。日本から移入した金属製の長キセルもアイヌの家で煙草入れと共に大切に保存しているのを見かける。木のキセルをニキセリ（ni-kiseri 「木・キセル」）、石のものをスマキセリ（suma-kiseri 「石・キセル」）という」（pp. 255—257）と説明される。7は石製, 8は木製, 9は樹皮製, 10は交易品の金属製である。このうち樹皮製のものはほかに類例がみられないものである。

なお, 網走市のジャッカ・ドフニ資料館にサハリン西海岸スタロアインスコエ（来知志）出身の故藤山ハルさんの製作した木製煙管が1点所蔵されている。その説明によると, 木で作った煙管はニイ・キシル（nii-kisiru）と呼ばれるが, 昔はトルッカ（trukka）と呼んでいた。ほとんどは男性が作ったとされている（ウイльта協会資料館運営委員会編 1980: 59）。後で述べるW7タイプの形態をとっている。

ではここで, サハリンアイヌの煙管そのほかについて述べた馬場脩の論文を紹介しておこう（BABA 1949）。まず煙管（パイプ）についての説明がある。

アイヌ自身が作ったパイプは, サハリンアイヌの石煙管（シマ・キセリ）と木製煙管だけである。北海道アイヌはまた, 以前に, 石煙管をもっていた。それはしばしば北海道の竪穴から発見された。竹製の管〔ラウ〕をもつ金属製火皿と吸口のものは, すべて輸入品である。北海道アイヌはそれらを大半は日本人から, サハリンアイヌは満州人から入手した。サハリンアイヌの間で, 1809年には, 1本の満州人のパイプの交易価格はテンの皮1枚であった。木製煙管は大半がアイヌ女性の間で用いられた。彼らはそれをノリウツギの枝から製作した。PL. L〔本

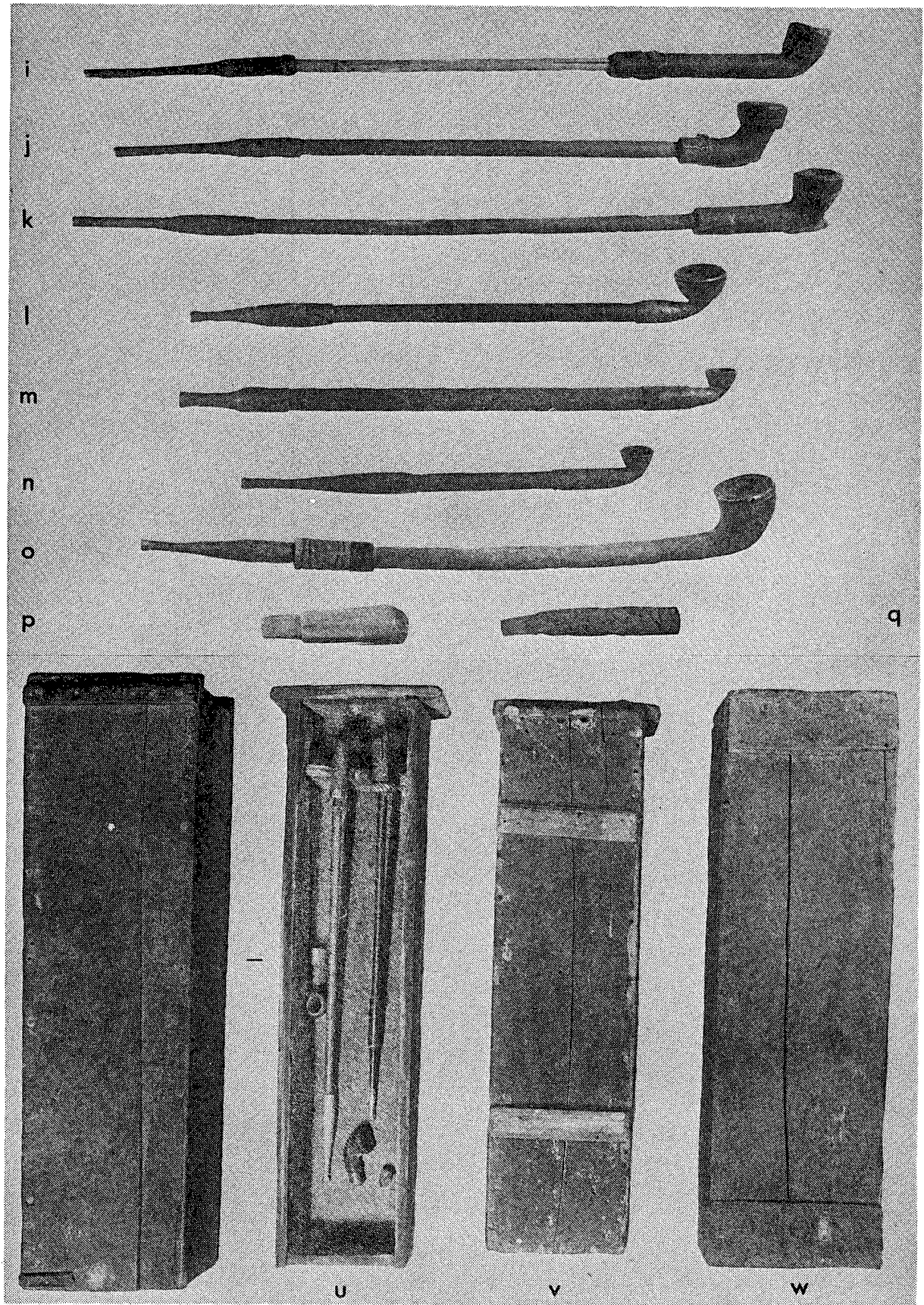


図14 サハリンアイヌ・北海道アイヌの煙管など

論図14] の i ~ o に 7 本の煙管を示したが、私がサハリンの多蘭泊〔カリーニノ〕で採集したものである。ある人類学者は、これらの石煙管の火皿が満州からの輸入品とみなしたが、私はそれらがサハリンアイヌ自身の製作であることを多くの人から告げられている。彼らは自分たちのナイフで軟らかい石を彫刻した。私は製作のはじめ段階の未完の火皿の決定的な標本をもっている。登富津〔トゥフツ〕のアイヌは、登富津川の川底にこの目的にかなうたくさんの良い石があると私に語ってくれた。その石はたぶん泥板岩〔shale〕である。

(i) 火皿の境目に一列の列点が刻まれ、吸口は中国製である。長さは約 36cm。

(j) 火皿には 1 本の直線が刻まれている。その基部の上にわずかに出っ張った装飾的な平らな皿があり、7つの山形文が刻まれている。吸口は中国製である。

(k) 火皿は最近のものに類するタイプである。その境目に波状文が刻まれている。吸口は中国製である。同じタイプの石煙管の火皿は、たぶんアムール河口付近の原住民の間で使用された、と私は考えている。

(l) これは中国タイプの形態である。日本の交易記号が火皿に刻まれている。それは実際に中国パイプの日本人の模倣である。徳川政府以来、アイヌに対する交易品が江戸（東京）、大阪そしてほかの町でたくさん製造されていたのである。

(m) 典型的な中国の煙管。

(n) 典型的な日本の煙管。

(o) 典型的なアイヌ女性用の木製煙管である。このタイプの火皿は、通常、ひじょうに大型である。二つの装飾のある骨が茎〔ラウ〕の末端にさし込まれている。吸口は銀製で、フクロウのデザインが彫刻されている。木製煙管は大半が女性の間で使用されるが、私はまた小さい火皿のこの種の男用の煙管をもっている。彼らはまた最近使われているシガレット・パイプをもっていた。

(p) シコタン（色丹）島のクリールアイヌのシガレット・パイプであり、アザラシの歯で作られたおよそ40年前のものである。

(q) 北海道の日高アイヌの木製のシガレット・パイプである。

また、小道具を入れておく箱があるが、それは箱枕あるいは木枕と呼ばれているものである〔図14下〕。

アイヌのとくに男用の木枕は引き出しをもっており、その中に何本かの煙管、未使用の雁首と吸口そしていくらかの煙草が保管されている。……

(u) 新聞〔東海岸ポロナイスキー区（旧敷香郡）ノヴォエ〕のサハリンアイヌに属するものである。長さ約 50cm、幅 13.5cm、高さ 10.5cm。蓋の両端には細い当て木がある。すぐ下〔右〕にみえる引き出しの中には、2本の煙管が横たえられており、いくつかの未使用の煙管の雁首部がある。

ちなみに、(v)の木枕は多来加〔ネフスコエ〕アイヌのもの、(w)は北海道の日高地方のポロサルアイ

ヌの木枕である。

なお、E. S. モースの煙管の紹介がある。それによると、図15を参考にして以下のような説明がある（モース1971：183，図731）。「私は松浦武四郎が私にくれた、蝦夷と樺太の煙管の写生図を、ここに出す。彼がつくったそれ等の略図を、私は正確に写した。朝鮮の煙管は、日本

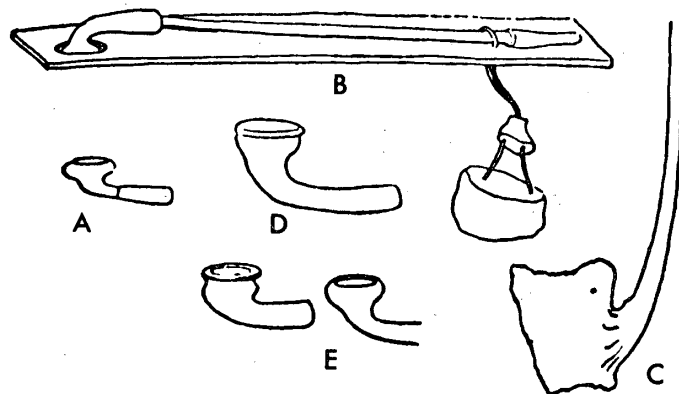


図15 モースが紹介した煙管

やアイヌのそれに比較して、余程雁首が大きい、それ以外の点は大きに似ている。三百年も前の日本の版画を見ると、日本人が非常に一般的に使用し、その後の版画にはくりかえし出ている煙管がまるで出て来ない。これは面白いことである（図731〔図15〕のAは鉄製の古い日本の煙管。B，Cはアイヌ。Dは満州。Eは樺太。）」（p. 182）とある。Cは木製のように見受けられる。松浦武四郎からの資料提供で、そのスケッチを正確に写したということであるから、資料的価値は高いものと考えられる。なお、モースが松浦武四郎を訪問したのは、1882年（明治15）のことであるといわれる（関 1990）。

7 北方諸族の民族資料としての煙管・パイプ

7-1 ウィルタの民族資料

図16—4は、河野広道コレクションとして、サハリンで採集されたウィルタの木製煙管である（旭川郷土博物館編 1973：23，P L. 583—23）。長さ 5.9cm，高さ 3.6cm，直径 2.4cm とある。この資料に関する池上二郎の説明では、煙草のパイプ（moomoo）とされ、雁首部であり、これに管（吸口とラウを兼ねた部分）がつくという（池上 1982：107）。

7-2 ニヴヒ（ニクブン）の民族資料

図16—1は、『北夷談』（松田伝十郎，1808—09・文化5，6年サハリン紀行）にみえる石製煙管である（高倉編 1969：119）。「スメレンクル自から製する處の喜世留（キセル）は石を以て図のごとくなり」（p. 119）と説明される。スメレンクルとは、アイヌがニヴヒのことを呼称する他称である。

図16—2は、『北辺分界余話（巻之九）』（間宮林蔵口述，村上貞助編 1811・文化8年）に収録されている「石煙管」図である（洞・谷沢編注 1988：94）。そして「夷〔スメレンクル〕みづから製する処の煙管（きせる）あり。図のごとく石を以て是を造る。」（p. 92）とある。この記録は次の史料とともに前の出典史料と同じ内容を指しているが、描きかたによって雁首部のようすが若干異なっている。ともあれ、石製雁首に木製と思われる吸口を兼ねたラウがついている資料である。

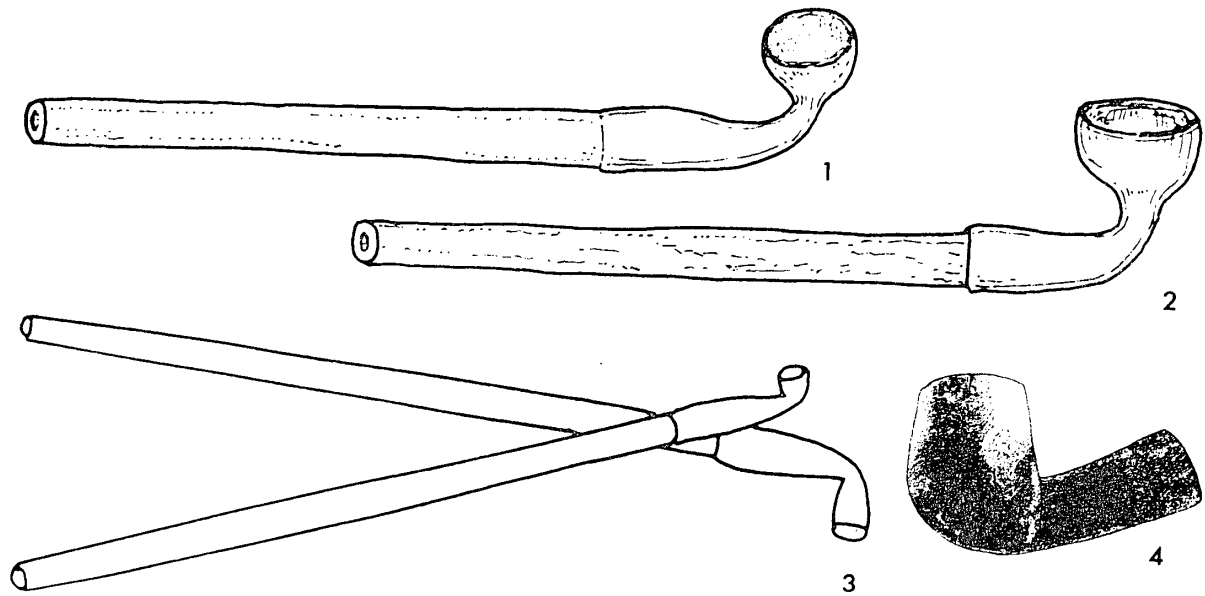


図16 ウィルタ（4）・ニヅヒ（1～3）の煙管

図16—3は、『北蝦夷図説（卷之四）』（間宮倫宗口述，秦貞廉編 1854・嘉永7年）に掲載された「煙管図」である（大友編 1944：371）。前二例と同じ内容の「夷〔スメレンクル〕みづから製するところの煙管あり。図のごとし。石を以て是を造る。」（p. 364）と説明される。

ところで，加藤九祚は，この史料に書かれた「然るに林蔵持ゆく所の沙糖を出して是を嘗しむるに，唯美なりと称するまでにして，更に余りを食ふ者なく，酒，烟草を出して少し是を嘗しむれば，忽其味を悦び，余りを乞ふこと殊に切にして，著しき者に至りては顔色相貌平生に異なるに至るものあり。北夷の嗜好是を外にして他物有ことなきことを知るべし。」（pp. 357—358）という酒・烟草とくにタバコの記事に注目している（加藤 1986）。そして，J. シュレンクの記録を紹介している。

シュレンクは，アムール川下流部にタバコの入った時期を清朝の初期（彼は1644年としている）とし，経路を日本から朝鮮，朝鮮から満州，満州からアムール川下流部と考えている。日本にもたらされたのは17世紀初頭ポルトガル人を通じてであり，満州でのタバコの有名な産地は吉林とされている。19世紀の中頃，ナナイ族はすでにタバコを栽培していた。ギリヤクとウリチはサハリンのギリヤクとオロッコにタバコをつたえたが，アイヌは日本人によってタバコを知った。アムール川下流部の場合，19世紀後半になると，ロシアからもタバコが入ってくるようになった。

ギリヤクその他の原住民はタバコとともに中国から煙管もとり入れた。吸口の部分は，金属ではなく，軟玉やめのうなど石製のものが好まれた（注：私がモンゴル旅行で見たところでは，モンゴルにおいても同様であった。）。タバコは2人が交互に吸い合う場合が多かった。3人も4人もが一緒にまわし飲みすることはなかった。来客があると，主人はまず，タバコをつめた自分の煙管をすすめた。これは客にたいするもてなしと考えられた。ギリヤクはタバコがなくなると，彼らはさまざまな草木の葉をタバコに混ぜたり，それだけで吸ったりした。彼ら

の間ではタバコを嗅いだり、噛んだりする風習はなかった。(加藤 1986 : 215—216)。

このシュレンクの記述についてはまた後でくわしくみることにする。

7-3 ナナイの民族資料

アムール川中流域のナナイに関しては、И. А. ロバーチンの報告がある (ЛОПАТИН 1922)。タバコは「麻醉性のもの」という項目に入れられ、その中で煙管について、以下のように触れられている。「喫煙に用いられるパイプは、長い木製の煙管である。金持ちのゴルジ〔ナナイの旧名称〕は、特別に高価なコハクもしくは銀製の吸口のある銀製煙管を持つことができる。ゴルジは煙管を中国人から手に入れるが、たびたび自分でも作っている。最近のできごとであるが、いつでも金持ちの珍妙な彫刻で飾られた煙管に出会うことがある。」(p. 111)。



図17 ナナイの喫煙図

図17に図示したものは、シュレンクの記録にみられる「樺皮のテントの前の夏服を着たゴルジ」の喫煙図である (SCHRENCK 1856 : 1010, PL. XXX)。この場合の煙管は雁首のようすから金属製のもののようである。

7-4 エヴェンク (オロチョン) の民族資料

図18—1は、大興安嶺で採集された河野広道コレクションであり、現在は旭川郷土博物館の所蔵品である (旭川郷土博物館編 1973 : 41, PL. 584-57)。煙管 (muhitut) といっても直状でパイプに近い形態で、火皿部をもたないものでラウと吸口部かと思われる。木製かと考えられる。長さは14.8cmで、直径1.2cmとされる。その長さから考えてやはり煙管の範ちゅうに入るのであろう。

図18—2も、大興安嶺採集の河野コレクションであり、現在は旭川郷土博物館の所蔵品である (旭川郷土博物館編 1973 : 41, PL. 584-58)。雁首部のみであるが、骨製という。ラウ側には鉄製の輪金が巻かれている。長さ6.4cm、直径3.2cmである。

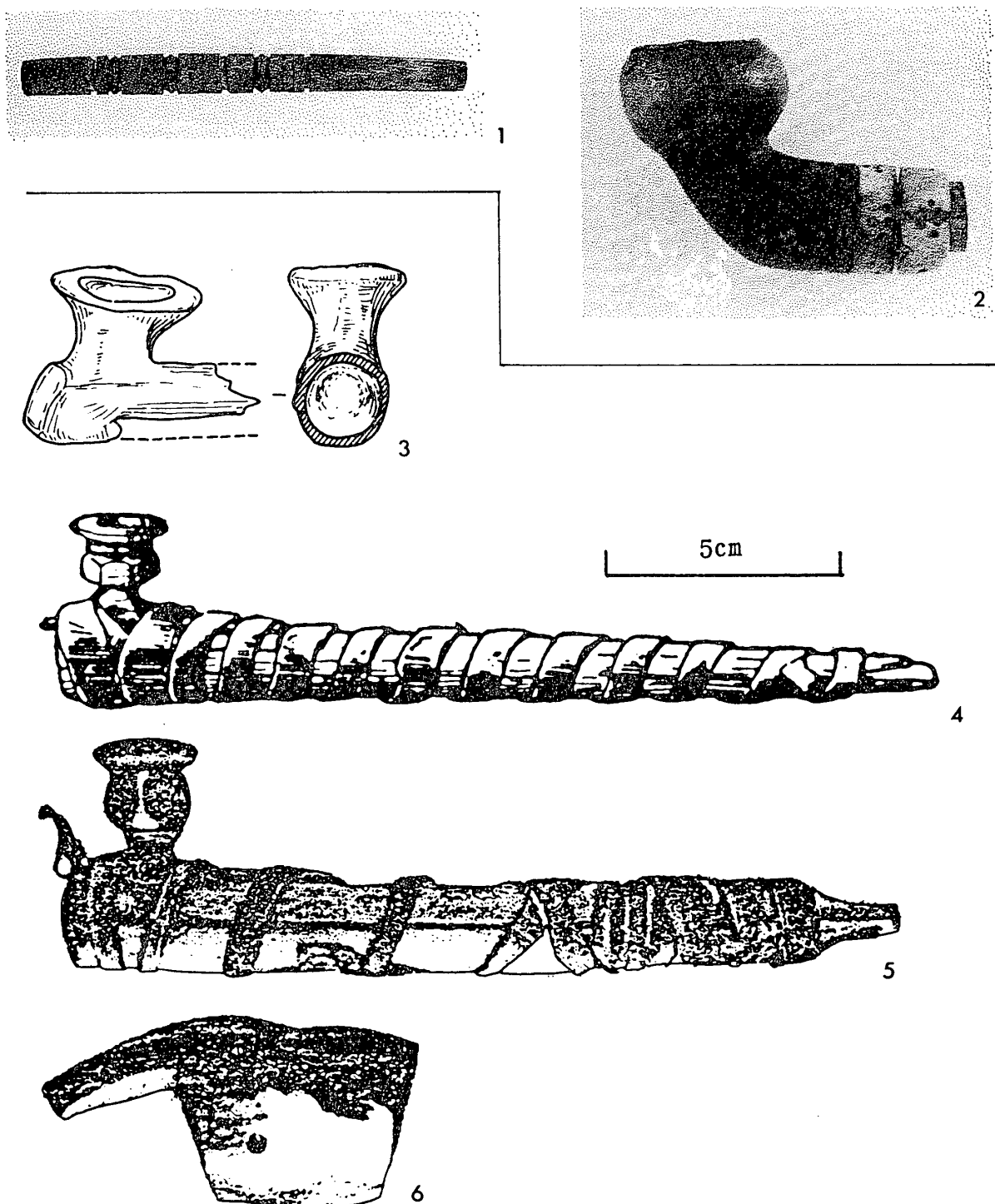


図18 オロチョン（1・2）・コリャーク（3）・ヤクート（4～6）の煙管とパイプ

7-5 コリャークの民族資料

図18—3に示したものは、鹿角製の煙管である（ВЛОВИН 1973：299，図Ⅲ—8）。雁首部の一部が残っているが、残存部の長さは 5 cm ほどで、高さは約 4 cm である。脂返しの部分が前方に出るという形態的特徴をもっている。火皿部は大型である。

7-6 ヤクートの民族資料

図18—4は、ハンブルグ民族博物館所蔵の木製煙管である（ビーハン 1944 : 31, 図193）。革を巻きつけており、雁首は真鍮製とされる。さらに「嗜好物としては今日では至るところロシア製の火酒と煙草がひどく要求されている。煙草は一しばしば植物繊維を混ぜて一雁首が小さくて木か骨か金属で出来ている木製の煙管で吸われる……東部沿海地方においては煙管は一しばしばアラスカのイヌイト人の間におけるごとく一全体が骨または海馬の牙で作られ、絵の彫刻で装飾されている」（p. 36）ともいわれる。

図18—5は、前例に類する資料で、雁首が真鍮製の木製煙管で、革が巻かれている（ЛЕВИН & ПОТАПОВ 1956 : 278, 図2）。

図18—6は木製パイプとされる参考資料である（ЛЕВИН & ПОТАПОВ 1956 : 278, 図5）。

7-7 チュクチの民族資料

チュクチ族の民族資料については、W. ボゴラスがよくまとめている（BOGORAS 1904）。それを図19にまとめてみた。そしてそれらの説明は以下のようになされている。

タバコのパイプは種々の形態のものが使われている。もっとも古く単純なもの（図118-a, b [=本論の図19—3・4]）は、柄が二つの部分から成っており、それらは大きさが同じでなく狭い方が底になっている。柄は革紐で巻かれており、火皿（図118-b [同4]）は錫もしくは白目（pewter）で作られ、いくぶん中国のものに類似している。実際に、中国製の真鍮の煙管はひろく東シベリアのすべての民族の間に広まっており、疑いもなく土着の製品に影響を及ぼしている。別のパイプは錫もしくは白目製の火皿をもち、丸い木製の柄である。それらは図118-a [同3] に示したような方法で結ばれているが、図119-a [同5] 例のように柄は一本作りである。根元にひとつの穴があり、栓で閉じられ、それは抜けないようになっている。

コレクションのいくつかは同形態で、骨製の火皿のものあるいは石製でノミで雑に穴をあけたものである。別のパイプ（図119-d [同7]）は木製の一本作りのもので、ひじょうに小さい火皿とふくらんだ柄をもっている。それらすべてが下面に穴があり、栓で閉じられている。その穴を通じて、黒い残りかすがパイプからとり出せるのである。これらのパイプのいくつかはひじょうに大型である。コリマ地方で、私は老婦人が自分のパイプを棒のように肩にのせて運んでいるのを見た。実際にそれは武器として使われていたのかも知れない。ヨヘルソン氏のコリャークのパイプはおよそ 60cm の長さがある。

一本作りのパイプのいくつかは白目製で、パターン装飾が配されている（図119-b, c [c は同6, bは図20—1でインディアンポイントエスキモーの例]）。火皿と吸口が白目製で、木で外おいされているものがある（図120 [同8]）。木部は表面に溝が彫刻され、端の火皿にさし込まれている。それは紙の管でつながっている。金属部はこのように同時に作られており、白目は火皿の中に流しこまれている。このパイプは、後にナイフとヤスリで仕上げられて

北方地域の煙管と喫煙儀礼

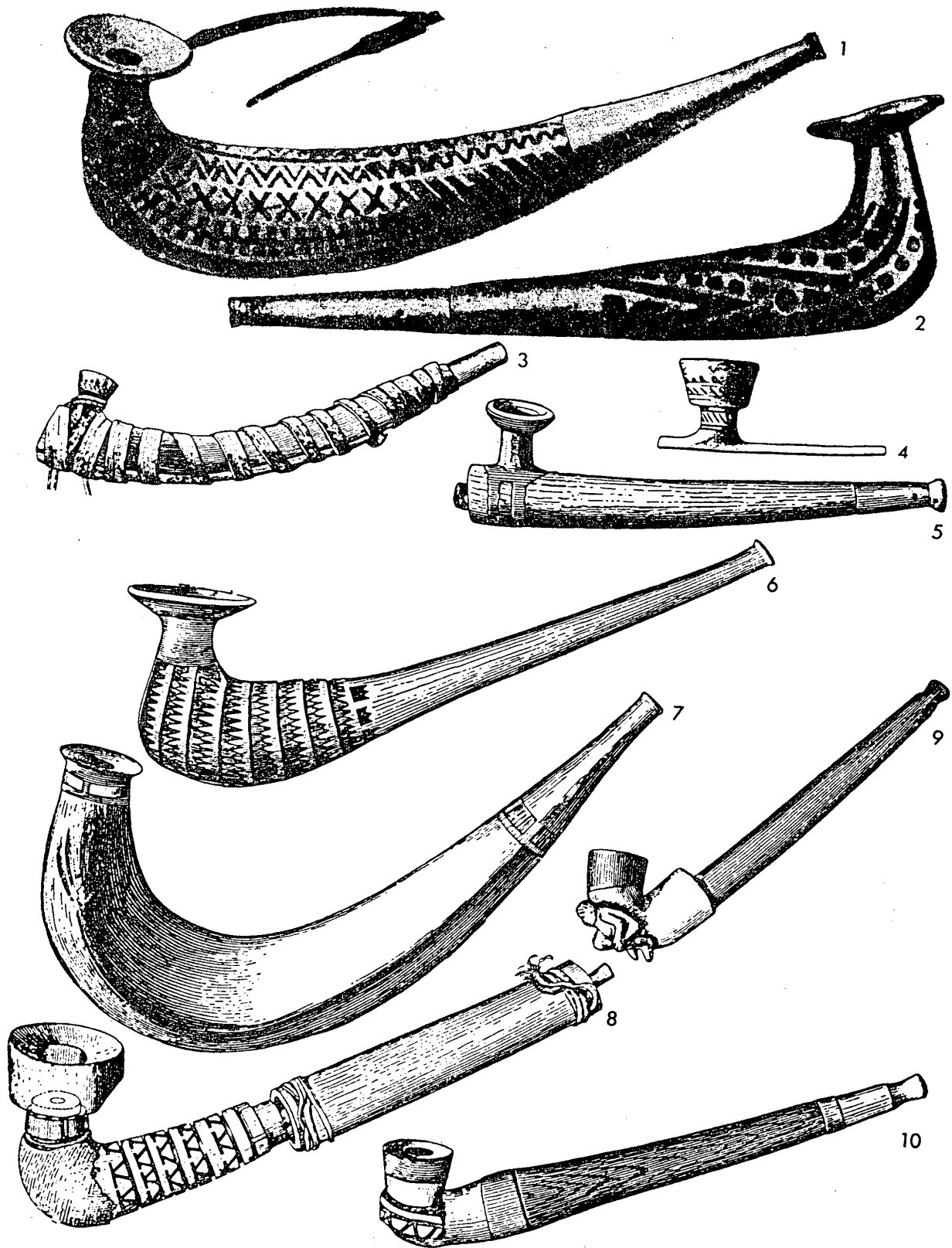


図19 チュクチの煙管

いる。

図121-a, b [同10・9] のスタイルのパイプは、象牙製火皿をもっており、柄は木製である。その形態はヨーロッパで一般的なものに近く、おそらくその模倣であろう。火皿はひじょうに上手な彫刻で飾られている。この作品はチュクチの間では稀で、コリャークのパイプに大きなバラエティーの彫刻パターンがみられる。(p. 202)

以上のそれぞれの大きさ(長さ)は、5は17.5cm, 6は23cm, 7は45cm, 8は32cm, 9は20cm, 10は18cm である。また、図19-1・2は銀の象眼を有する木製の煙管である(ИВАНОВ 1963: 189, 図118-1・2)。幾何学的な文様がナイフで施されているが、それにはジグザグ・角・斜線・斜十字・円・半円・分岐・水平条・交差文様などがあるという。

7-8 エスキモーの民族資料

図20-1は、前に説明されたものである(BOGORAS 1904: 203, 図119-b)。インディアンポイントエスキモーのもので、長さ26cmである。同図2は、セントローレンス島エスキモーのもので、牙製、長さ23cmである(BOGORAS 1904: 204, 図122)。ボゴラスはさらに続けて述べている。

〔チュクチの〕すべてのパイプはアラスカエスキモーのものに似ている。……けれどもアラスカエスキモーのパイプのいくつかは、火皿本体が高く、縁は広くより平坦になっている。この違いは原住民が指摘してくれた。さらに、アメリカのパイプは牙を彫っているが、その同じ形態を保持して単純な

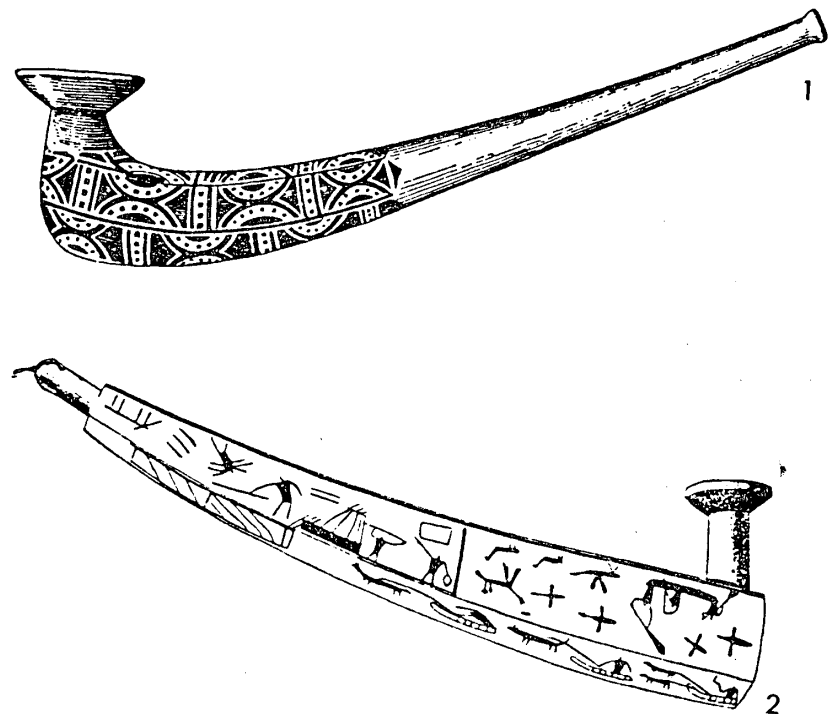


図20 エスキモーの煙管

形である。アジアのその場合は、前に注意したように、洗練された形態にたとえられる。アジアエスキモーはチュクチのパターンにひじょうに類似するパイプをもっている。一方で、セントローレンス島の牙製パイプは、アメリカの形態をすでに示している。その上、それらの柄は絵文字のエッチングが彫られている(図122 [図20-2])。アジア側では、パイプ製作者はレ

リーフを施すだけである。(p. 203)

以上、いくつかの民族資料としての煙管あるいはパイプをみてきた。アリュートについては、加藤九祚(1986: 49)の指摘にもあるように、嗅ぎ煙草あるいは噛み煙草の習慣があったようであるが、煙管を使用した記録はあまりないようである。しかし、L. S. ベルグによるとアリューシャン列島最西部のアツ島のアリュートに「二本の支那式煙草パイプと僅少の南京玉とを……与えた」(ベルグ著、小場訳 1982: 272)と記録されるように、1747年にはすでにアリュートの間におそらく金属製の煙管が渡っていたのである。

ほかに東シベリアのケトゥィの民族資料がみられる(ЛЕВИН & ПОТАПОВ 1956: 690, 図10・11)が、これも雁首部などの形態からパイプに入れられるものである。

また、大槻玄澤の『環海異聞(巻之七)』によると、1789年~1791年と1792年の2度の大国屋光太夫のイルクーツク滞在中の記録に、ロシア人の喫煙習慣や煙管のことが次のように出てくる。

煙草は男女老若をこなべて服するにはあらず、まれまれにのむ人あり。上等の人は時々慰にのみ楽しみとする様子なり。煙管は金石木磁器様々あり、総名をガンザといふ。焼物にしたる物をバトロブコといふ。銀にて作りたるも見たり。右にいへるごとく、人々皆用るにはあらず、但海上渡世する人は多くは喫煙するなり、是はツंगा……といふ病を防ぐため也と也。止白里〔シベリア〕地方の種族ヤコーテ、ブラーツケは至て是を好み服す、みな木管なり。

ここに登場するヤコーテはヤクートを指し、ブラーツケはイルクーツク近住の土着民の総称である。なお、この他に嗅ぎ煙草(鼻煙)のことも記録されている。

同内容の記録として、桂川甫周の『北槎聞略(巻之八)』がある。

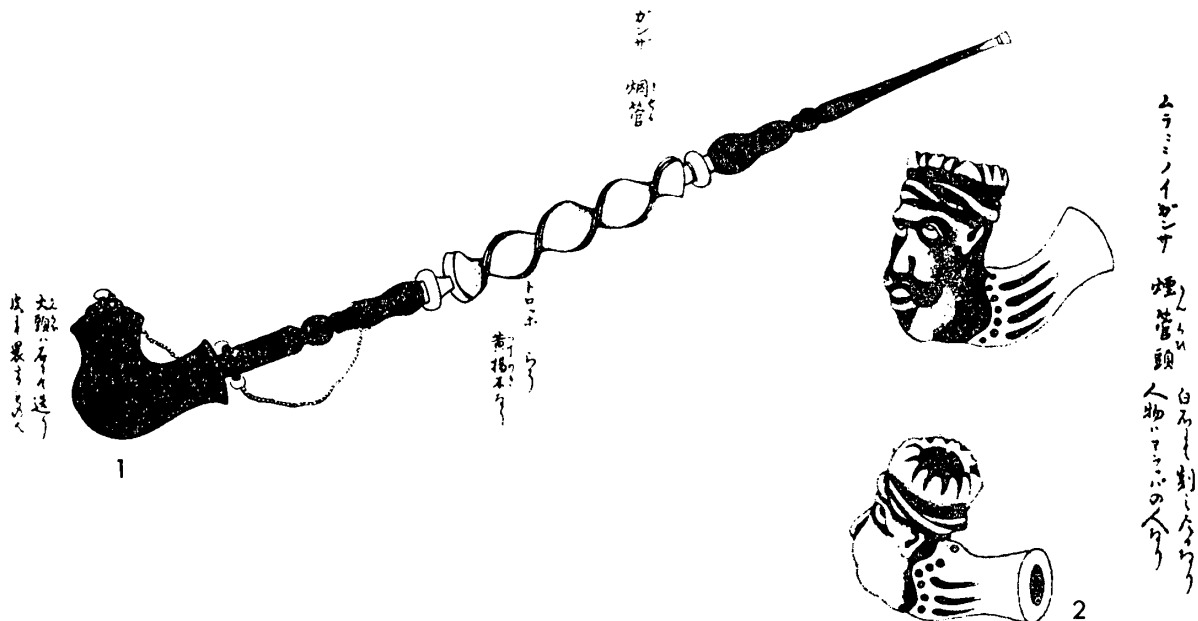


図21 『北槎聞略』にみえる煙管

烟草 烟草は彼邦にてもタバコといふ。其土にも産し他邦よりも多く来る。上下共に甚嗜み好むなり。殊にトレツコイ（都爾格）より来るを上品とす。烟管は火皿を石にて造り、皮にて裹む。管は木にてもみぬくなり。嘴は角にても木にても造る、又全く黄銅又は磁にて造りたるも有なり。海島の夷人等は木にても造る。……

なお、図21はこの『北槎聞略』に載せられた烟管である。説明どおり1は石製雁首が皮で包まれている。ラウはツゲノキとある。2は人面を表現した白石製雁首である。ともに「ガンザ＝烟管」である。

8 煙管の基本形態の分類

ここでは、以上の考古学的資料ならびにいわゆる民族資料としての煙管を型式分類してみる。図22は、北海道・サハリン・クリール・シベリア各地の煙管の基本的な形態を、模式的に示したものである。上段は考古資料、下段は民族資料である。そしてこの分類基準としては、材質および形態の二つを考えることができる。すなわち材質の面からは、以下の4つが基本であるが、骨あるいは角製のもの（B）も考える必要があるかも知れない。

S：石製のもの C：粘土製のもの

W：木製のもの M：金属製のもの

また形態分類では、次の8種に分類が可能である。

- 1：火皿がまだあまり意識されず背が低いタイプ。
- 2：火皿を意識的に作り背を高くしたタイプ。
- 3：さらに火皿の基部に刻線を入れて火皿を強調するタイプ。
- 4：雁首のラウ側の根元を太く強調したタイプ。
- 5：4とは逆に、雁首のラウ側の根元を細くしたタイプ。
- 6：吸口部を強調したタイプ。
- 7：吸口部の狭義の吸口を細く作ったタイプ。
- 8：雁首の脂返し部の下面に安定部を作り出したタイプ。

そして、図22上段の考古資料S1としては、本論の資料3・37が該当する。S2は資料2が入るであろう。S3は資料9・12・23、S4は資料1・11、S5は資料6・10がこれに入るが、資料6では火皿に彫刻文様が施されている。S6は資料21・22をこれに入れてよいであろう。S7は資料43・44が該当するが、シベリア出土の例である。

C1は資料13、C2は資料15、C3は資料14・16が属する。

M7は資料7・8・18・19・41・45～48などが該当する。ただし、このタイプも肩付きとそうでないものあるいは1本作りか否かで細分できるが、ここでは一つにしておく。

図22の下段の民族資料S3には、本論図7—1、図12が含まれる。S7としては図9—3、図13—4、図14—iなどが入る。S8には図13—1・2・7、図14—j・kなどがある。W3には図9

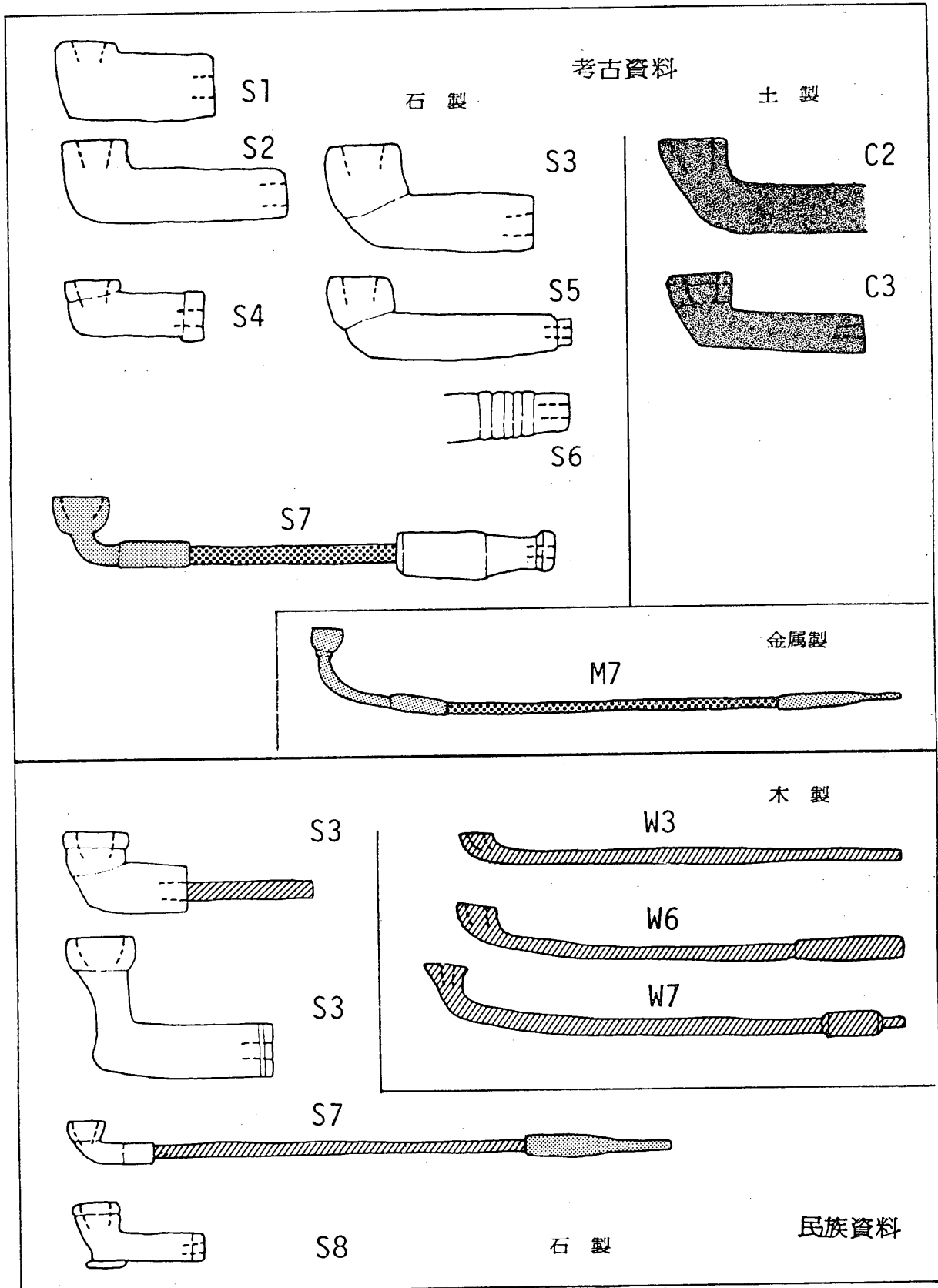


図22 北海道周辺の煙管の分類

—1・4, 図11—1～6が入る。W6としては図7—2, 図9—2, 図10—1, 図11—7などがある。W7は図9—5・6, 図13—5・6・8などが含まれる。図14—0もこれに入るであろうか。

このような分類が現在までの資料で可能であるが, 木製煙管は民族資料でのみ確認されている。その原因は, 考古学的には木製のものは不朽してしまい, 残存しにくいということにあるのかも知れない。また, 考古資料・民族資料ともに雁首だけのものは, 本来, 民族資料のS3あるいはS7のようにラウ部が竹のような材質のもので構成されていたのであろう。また, 分類図では民族資料の中に金属製煙管(M7タイプ)を入れなかったが, 当然のこととしてたくさんのものが存在することは確かである。

以上の形態分類から, 1タイプから2タイプへ, 2タイプから3タイプへ, 3タイプから4・5タイプあるいは6タイプへ, さらに3タイプから8タイプへという雁首の変遷あるいは発展過程を考えることができるようである。

考古・民族資料ともにS7タイプとしたものは吸口での分類であるので, その雁首の形態をみるとS4タイプと関係しているように考えられる。さらにその全体の形状・各部の構成はM7タイプとした金属製の煙管と基本的に同じである。そしてその構成が, 近現代の煙管としてもっとも普遍的な形態のようである。このように考えると, 雁首形態がよりシンプルな石製・土製の煙管が金属製のものより古い形態を示すとも考えられる。木製のものも同様である可能性が高い。しかしそれは材質による製作上の問題なのであろう。

ところで, この分類は北海道・サハリン・シベリアにおけるものが主体である。クリール列島出土の考古資料をみると, 資料38・42(図5—2・5)のような骨製の煙管がある。これらは, その材質がほかに例がないこととも関連して, 形態上はいわゆるマドロスパイプに属するものである。

また資料39(図5—3)のような陶製パイプの出土例もある。これらはロシアあるいはそれを介してのヨーロッパ方面の遺物である。ただし, 資料37(図5—1)のS1タイプや真鍮製の煙管なども出土しており, 北海道・サハリン・シベリア地域との関連も考えられるのである。この資料39の陶製パイプに関しては, 雁首の形態(火皿と脂返しのなす角度)がオランダのいわゆるクレイパイプに近いものである(小林 1991)。

また考古資料の中で, 資料4(図2—4)は特殊形態なのでここでは扱わなかった。さらに民族資料として, 図9—8の吸口部が二又になった木製煙管はクマ送り用の特殊例である。そして図13—9の樹皮製のものもパイプ状で特殊なものであるので, この分類では扱わなかった。

では, もう少し別の民族資料をみておこう。サハリンのウィルタの場合は, 図16—4のような木製のパイプに近い形態の煙管がみられる。それはS3タイプをWとしたようなもので, S3とW3の中間形式ともいえるものである。仮にSW3タイプとしておこう。

同じくサハリンのニヴヒの例では, 図16—1～3に示したような石製煙管があるが, 雁首が石製で, ラウおよび吸口は竹のような木製品であると思われる。雁首の様子があたかも真鍮製のごとく描かれているのは多少疑問が残るが, とまれ, 煙管分類の上ではS3タイプに属していると考え

てよいであろう。

シベリア大陸のナナイの場合は、木製の煙管（W3・6・7タイプか）とコハクあるいは銀製の煙管（S7あるいはM7タイプ）を中国人から入手しているとされる。自製のものが木製煙管である。

エヴェンク（オロチョン）の例では、ラウと吸口部が木製らしい例（図18—1）と骨製のタイプ5に似た雁首が知られている（図18—2）。仮にB5タイプとしておこう。

北方のコリャークでは鹿角製煙管の雁首が知られているが、それは火皿が大型でタイプ3に入れられるものであろう。B3タイプとしておこう（図18—3）。

さらにヤクートの場合はきわめて特徴のある煙管を使用している。雁首は真鍮製である。そのほかは木製であるが、上下2枚の木を使用してその上に革を巻きつけているようである。ここでの分類に当てはまらないものである。強いていえばM3変形タイプである（図18—4・5）。

同様の作りのものはチュクチでも使用している（図19—3）。金属製の雁首に木製のラウ・吸口が革で巻かれているものである。この例は前者にくらべて木製部がやや反っており、パイプ状の感じを与えている。チュクチの場合はほかにもいくつかの形態のパイプをもっている。図19—5・8～10のように比較的ラウと吸口に相当する部分が直線的な煙管に近い形態のものと、それ以外のラウが湾曲してパイプの感じを与える形態のものがある。

そして後者の形態のパイプは、インディアンポイントエスキモーやセントローレンス島エスキモーのパイプと共通するものである（図20）。

このように、北方地域の煙管あるいはパイプの形態分類をみてきたが、煙管と呼べる形態のものの広がりには、北海道・サハリン・クリールのアイヌおよびニヴヒ、コリャーク、チュクチ、ヤクート、ナナイ、ブリャート、トゥヴァといった極東～東シベリアの諸族の間にみられる。さらに、西シベリアではセリクープ、チュルィムスク・タタールなどの間にも広がっているようである。この西シベリアの例は全体が1本の青銅製の煙管のようである。そのタイプはまた、日本などで使用されたラウ・吸口を雁首とは別にするタイプとは異なり特徴あるタイプの一つであろう。M7*タイプとしておく。M7変形タイプの意である。

以上、管見の限りではあるが、北方地域の煙管やパイプの考古資料と民族資料をみてきた。ここで、煙管に関する形態分類が地域的な広がりではどのような特徴をもっているのかを検討しておこう。図23を参照されたい。

図の上段は、考古資料としての各タイプの煙管の分布である。下段はいわゆる民族資料の場合である。考古資料に関しては、調査例が地域的に偏っているようで、北海道・南サハリン地域では石製煙管のS1～S6タイプが集中しているといえる。S1タイプは北クリールでも出土している。アムール川中流域ではS7タイプが報告されている。

金属製煙管のM7タイプのものは、北海道・南サハリン・クリール地域に一つのまとまりがみら

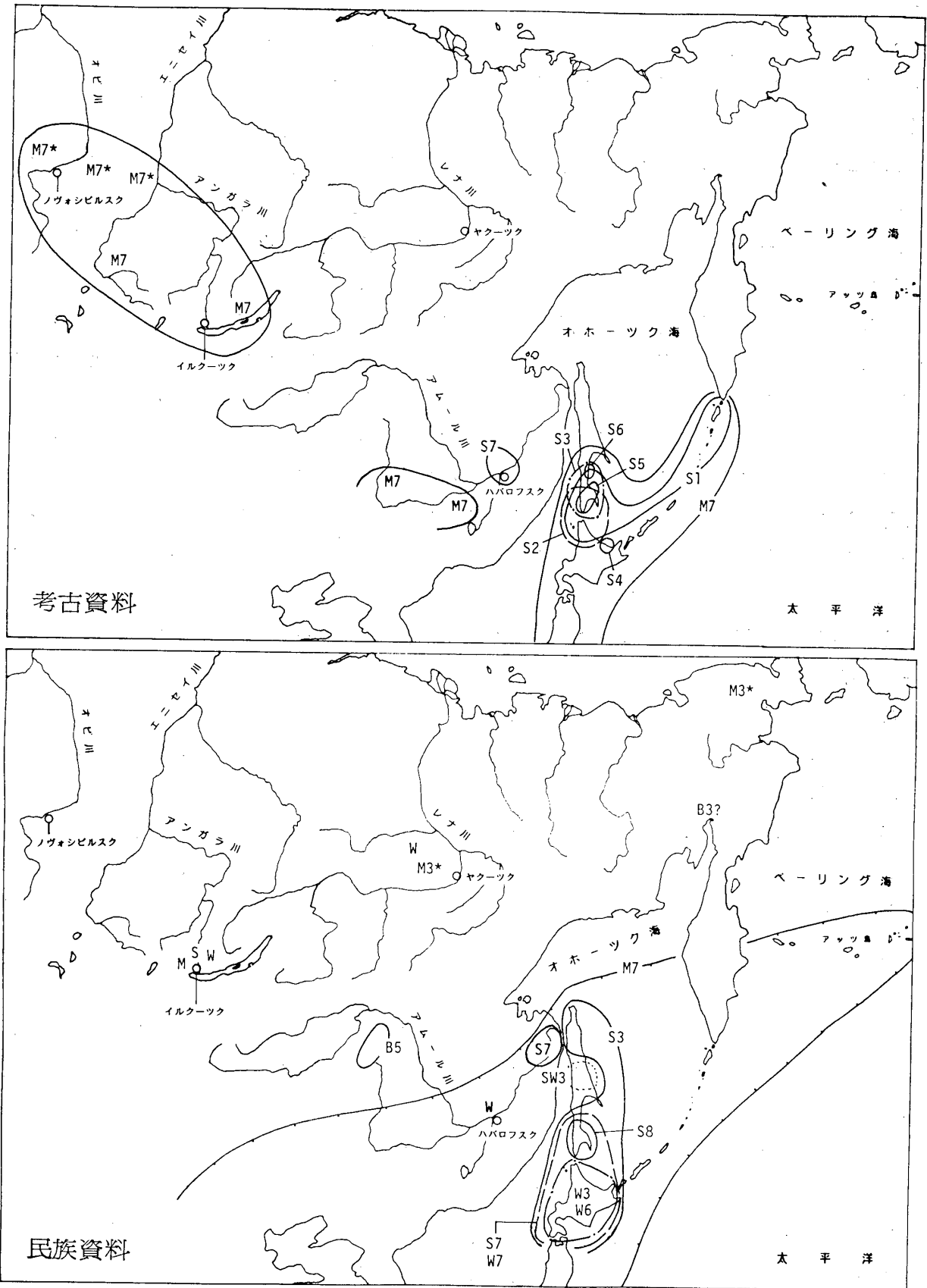


図23 煙管の各タイプの広がり

れる。また中国黒竜江省でも出土例が知られている。そして、エニセイ川上流域のイルクーツクからオビ川上流のノヴォシビルスク付近の東シベリアから西シベリアまでという別のグループが確認できる。ただし、このM7タイプは二つに分けられ、狭義のM7は東側の例である。

そして、M7*とした変形タイプは図6—3・4に示した雁首・ラウそしておそらく吸口も一体となった一本作りのものである。前者が中国の影響を受けていると考えられるのに対して、後者は別の系統である可能性を示している。この点については資料の増加をまつとともに中国方面の資料の検討も加えなければならないと考えている。

図23の下段の民族資料の場合をみると、S3タイプはサハリン北部から北海道地域に広がっている。ただしSW3としたウィルタの例は、木製で石製タイプ3の形態をもつものであるが、1例だけであるので詳細は不明である。

雁首の底部に水平台をもつ特殊な形態のS8タイプは、今のところ、南サハリンの一部に限定されるようである。

S7・W7タイプは南サハリンから北海道に広がっている。そしてアムール下流の原住民たちはS7タイプと考えられる煙管を使用したとされる。

もっとも普遍的なM7タイプは、北海道を含む日本からサハリンさらに遠くはアリューシャン列島のアッツ島まで広がり、中国製のものはアムール流域にも分布すると考えられる。

ほかの煙管としては、イルクーツクで確認された金属製・石製・木製のもの、ヤクーチャでの木製のもの、ナナイの木製のものなどがある。またヤクートとチュクチにみられるM3*タイプとした特殊形態のものはまだ類例が少ないが、一つの広がりをもつものと考えてよいであろう。ほかにコリャークのB3?タイプ、オロチョンのB5タイプが断片的にみられる。

現在、このような各タイプの煙管の分布が認められるわけであるが、考古学的には年代的に新しいということもあって、意図的に報告されなかった事情もあろう。今後はこの考古資料に加えて、民族資料の集成もより積極的に行っていく必要があると思われる。エスノアーケオロジーの一つの分析対象となると考えるからである。

9 喫煙儀礼について

では以下に、北方諸民族の間にみられる喫煙習慣の中で行われている「儀礼」的行為についてみておきたいと思う。アイヌの場合について、久保寺逸彦は本州におけるいわゆる「煙管受取り渡しの儀礼」がアイヌにも入って行われたことを指摘している（久保寺 1970：544-545）。ではその内容などについて紹介していこう。

9-1 北海道アイヌにみられる儀礼

久保寺の紹介にあるところであるが、「アイヌ語で煙草をタンパクと呼び、煙管をキセリあるいはイチエレンボというが、いずれも日本の語の転訛である。『煙草入れ（タンパコ・オップ）』はみ

な木製であるが、その形態は日本内地のものに祖型が見られるようである」(p. 544)として、次の史料で喫煙儀礼について述べている。

寛政年間のいわゆる蝦夷風俗画とされる寺沢次郎左衛門(?)の『蝦夷土産』には、

扨て女の子同士集りて煙草を吸ふを見るに、きせる一本にて三四人づつも寄集りてすふなり。
一吸吸ては次へわたし、又其通にして次に渡しとり吸なり。酒など飲も其座に居合たる夷人わ
少したりとてもわけ得さす。

とみえる。女子3, 4人が1本の煙管で一服ずつまわし飲みすることが読みとれる。

『蝦夷雑書』(明13, 開拓使稿本)には、

次に煙草を吸付換付す。尤其烟管を撫し、仰々敷取扱なり。右礼終らざる迄は互に無語
と記録されている。

金田一京助による説明を引用しておこう(金田一 1937: 27-28)。

煙草(tampako)はいつのころから行なわれたか、その名称は世界的に一致するから、或は
山丹から来たか、津軽から行ったか、アメリカインディアン方面からはいったか、不明である。
そのキセルはセレンボ(serembo)といって石の雁首へサビタ(rasupa-ni)の柄をすげて、い
ろいろな葉(及び葦)を点火して飲んだ。……

煙草はアイヌの長老には、やはり儀礼上のもので、炉傍に胡座して客と終日でも談話をし
ているものであるが、手持無沙汰になって手のやり場がないというような態度や、座側のものを
いじったり、埃をひねったり、というような態度は、貧乏人のすることと卑められる。そうい
う時に、煙草をもって座を崩さずに長老の悠揚たる態度をとらしめるのみならず、煙草は一つ
の言霊(itak-ramat)で、煙管を手に行っていると、言葉に窮することなく、あとからあとから
滞らずに出て来る霊力があり、言葉の上の思慮を補ってくれる神だと信じられた。

石狩や十勝の昔のアイヌになると、u-kiseri-uk「煙管の取り合い」ということがあって、お
互いの煙管をその座で交換して交る交る煙草を吸う礼が重い客の時に行なわれ、これをせぬ者
は、やはり貧乏人と卑められたから、一人前になると、必ず煙草入れを、丹念に彫刻して持ち、
客となっても、客を迎えても、会釈が済んで談話にはいると、まずおもむろにこれを出して交
る交る煙草を楽しんだものだといわれる。

聞き取りの相手によって若干の差があるが、いずれにしても「煙管受取り渡しの儀礼」あるいは
「煙管の取り合い儀礼」といったものがみられるのである。そして名取武光の場合は、敬虔な生活
の一部として喫煙習慣を紹介している(名取 1942: 43-44)。

アイヌの土俗品で石で造った煙管は、山鉦地方今の満州方面から輸入されて、大変貴重な持物
としてゐた。その形は我々の用ひる普通の煙管とほぼ同じであるが、ただ真鍮その他の金属で
出来てゐる部分が石で造られてゐると云ふ点が異なるのみである。アイヌ民族の喫煙の風習は、
……本来の意味は煙草と云ふものを仲立ちにして火の神を分けて吸ひ合ひ、食べ合ふのである
から、大変儀式張ったものであって、互ひに対座して一本の煙管で一定の形式に従って遣り取

りして吸ふのであるが、その時に煙管の頭部とらを「ラウ」との間を少し抜いてゆるくした俣、煙草を詰め、その上に吸ひ殻の火をのせ、雁首とらを「ラウ」の所をうまく指で持ち添へて相手に差し出すのである。相手が何気なく敬々しく受け取る途端にらを「ラウ」が離れるのである。そこで企んだ悪人が石で造った煙草「煙管」と云ふものが、どの位持ち物として尊いか知ってゐるであらう。それを承知でこわして了ふと云ふことはどうした遺恨のさせる業か、と言ひ掛りをつけ出して、所謂チャランケと申す一種の談判を始めて、相手から莫大の償ひを取るものである。このやうなことから後には対座して相手から煙管をすすめられる場合には、必ずまづ雁首とらを「ラウ」の所を指の間に持ち添へて受け取るやうな風習まで生れて来たのである。

このような名取武光がいう「悪の生活」習慣は、本来の意味が失われた極端な一例と考えられるが、ここにも「煙管受取り渡しの儀礼」が確認できるのである。

しかし現在は、この種の儀礼もかなり忘れ去られつつあるのが現状のようである。北海道教育委員会の手でアイヌ民俗文化財調査が実施され、その報告書が毎年提出されているが、その中で「煙管受取り渡しの儀礼」が記録されているのは、美幌地方の以下の例のみである。しかもかなり変形しているように感じる。

お客が来たら自分の飲んでいるキセルの吸い口を指で拭いて、相手に差し出す。客も飲み終わると同じようにして返す。そして挨拶の言葉を述べる……〔菊地股吉氏〕（渡辺ほか 1986：76）

ところで、このような北海道アイヌの間での喫煙習慣の普及を否定するような記録も一部に認めることができる。すなわち、イサベラ・バードの『日本奥地紀行』（高梨健吉訳、東洋文庫 240、1973：299）をみると、1878（明治11）年の紀行であるが、日高地方の平取において以下のようなことを記録している。

喫煙は決して一般に行なわれていない。したがって煙管や煙草入れは、日本人の場合と違って、日常の男子の服装の一部とはなっていない。

これはどうも偶然的な観察の結果であろうと思われるので、これをもって一般化することはむしろ危険と考える。たとえば、馬場脩はP. A. ロイペ（LEUPE）の著“Reise van Maarten Gerritsz Vries in 1643 naar het Noorden en Oosten van Japan”（Amsterdam, 1858）すなわち氏のいう『ヴリース日本北東探航誌』に記録された1643年当時の各地のアイヌと煙草の記事を検討している（馬場 1942：29-31）。

6月9日 十勝沖 「大鹿の皮一枚と薫製の鮭を司令官（フリース）に献上した。……彼等は御酒と煙草を貰ったら大層悦こんだ。」

6月13日 ノサップ岬沖 「人々は……煙草を欲しがった。……カワウソ〔ラッコ〕の皮と覚しい物と交換したがってゐたが其値を大変高くつけたがアザラシ〔北構 1983 によるとオットセイと訳されている〕の皮数枚と熊の皮一枚を煙草と取換へた。」

7月4日 クナシリ島 「……煙草をやったら、彼等は大層御礼を言って是れを受けとった。」

7月17日 カラフト大泊 「私の二本の日本の煙管を見せ、タコイタンバコ（友よ煙草）と言ってジャバの煙草をくばり皆一緒に煙草と酒を飲んだ。」

7月27日 カラフト散江付近 「此の家に二、三人の女がゐて、各自子持であって、一同大変欲しがってゐた御酒と煙草を飲んだ。」

8月26日 厚岸 「〔松前から来た〕日本船の荷は米、衣類、酒、煙草であった。」

8月29日 厚岸 「〔厚岸アイヌの首長の〕ノイサクは……私に日本の煙草三枚を呉れた。之をコカからもらったと言った。彼の言ふのには、コカは日本人のことであると言ふことである。」「下線は宇田川]

以上のように、17世紀中葉にはすでに北海道アイヌ、サハリンアイヌそしてクリールアイヌの間に煙草が広く普及していたのである。では次にサハリンアイヌにおける喫煙儀礼をみておく。

9-2 サハリンアイヌにみられる儀礼

サハリンアイヌの場合についても、北海道アイヌと同様の喫煙儀礼があるようである。まず知里真志保の紹介をみておこう（知里 1944：再録346）。それは、「樺太アイヌの説話」と題するものであるが、原文の出典は B. ピウスツキ（PILSUDSKI 1912）その他である。

他家を初めて訪問した際は一旦戸外で立停って誰か家人が出て来るのを待つ。……家人は戸口に出て来て、訪問者の人物風体などをよく見届けて、一旦屋内に引込み、家の主人に報告して、その指図を待ち、座席などを片づけ、新しい莫座など敷いて、更にもう一度戸口に引返して客を招じ入れる。客は家人に従って屋内に入る……客は先づ炉を中心として右の座—アイヌはこれを左座（ハリキソ）と呼んでゐる—に就く。主人夫妻は向って左の座—アイヌによれば右座（シムイソ）に居る。主人は客の様子によって、相当の人物と見極めがつけば上座（ロルイソ）へ招じる。そこで先づ客から主人に向って「エ・キセリ・エヘテ！」（お前の煙管をよこせ！）と云って主人の煙管を受取り、それに自分の煙草入から煙草を取って詰めて返す。すると主人はそれを受取って自分の傍へ置いて、今度は客の煙管を求めてそれに自分の煙草を詰めて客に返す。そして主客同時に煙管を取り上げて火を点けてのむ。これを「ウ・イク・レ」（互に煙草をのませ合ふ）と称する。次いで主客互に対座して儀式的な対面の挨拶を交換する。この時の辞令は総べて雅語を一定の音律に載せて綴った詩である。それが済むと主客互ににじり寄って「ウムラィパ」（撫で合ひ）といふことをやる。

また、註79（p. 365）でも「尚ピルスツキーの註にも『樺太アイヌでは他家へ客となって入った時は必ず家の主人の煙管に煙草を詰めてやるのが礼儀であり、主人はその後で同じ様に答礼するのである』』と紹介されている。

以上も北海道と同様の「煙管受取り渡しの儀礼」の範ちゅうに入るものであろう。実際は煙草の交換である。

ところで、筆者が聞き取りをした喫煙儀礼があるので参考までに記しておこう。日高地方の門別

町に在住されていたサハリンアイヌの山野ハナさん（アイヌ名＝イタキチュマハ、1899・明治32年～1987・昭和62年）の記憶によるものである（1984年8月1日、小泉妙子さん宅にて萩中美枝・金谷フサさんとともに聞き取り）。イラン・カラッテ（挨拶の言葉）に関するものである。

1)初めはすましている。

2)さすり合う挨拶（ウルイルィェ）～北海道では女同士が主であるが、樺太では男でも女でも行う。

3)煙草のやりとり～外からの客の煙管を受けとり、自分の煙草を詰めてやる。そして客に吸口を向けて渡す。すると客は自分で火をつけて喫煙する。火を落してから、その家の人の煙管に新しい煙草を詰めてお返しする。やはり吸口を相手に向ける。火は吸う人がつけても、つけてあげても良い。

4)言葉での挨拶に入る。

やはり、順序は若干異なっているが、「煙管受取り渡しの儀礼」をみることができるのである。馬場脩もサハリンアイヌの煙草作法について述べている（BABA 1949：7-8）。

……一人のアイヌが別のアイヌを訪問した時、家の主人は手厚い歓迎として客に煙草の一服を申し出るのが習慣である。最初に、主人は火皿に煙草を詰める。そして彼は自分で一服してから、それをひじょうに丁寧に客に手渡すが、一方の手は雁首に、別の手は吸口に添える。そして客は同じように注意深くそれを主人から受けとる。彼らはいつも石製火皿の煙管を使用していた。それは shima kiseri (shima: 石, kiseri: 煙管) と呼ばれ、貴い家族の宝物とみなされていた。客がその火皿をラウからはずして床に落すようなことがあったら、それは家長に対する侮辱とみなされた。時々、大きな賠償がそのような違反行為に対して要求された。そのため、主人によって煙管を手渡された時、客はじゅうぶんに注意し、落さないように両手でひじょうにしっかりと受けとるのである。もし誰か禍いをもたらすわづらわしい客が来た場合、煙管を手渡す前にできるだけ火皿を熱くしたということ、私は多くの老アイヌから告げられている。もし彼らがそれを落したら、主人は喧嘩を挑発 (charanke) して詫言させたのである。しばしば高い賠償であった。この種の石製火皿は、ラウに紐で結ばれているだけであるので、ひじょうにゆるいものである。私は、北海道アイヌの間ではこの種の喫煙方法をみたことがない。それはたぶん古い時代における習慣であり、忘れられてしまったものと考えられる。

同様の内容は馬場脩の別の論文にも紹介されているが、ここでは割愛する（馬場 1942：22）。

9-3 ニヴヒにみられる儀礼

ニヴヒ（ギリャーク）の喫煙儀礼に関しては、L. v. シュレンクがくわしい (SCHRENCK 1856)。煙草・煙管に関する記録および喫煙上の作法を抄訳しておこう。

煙草の喫煙はアムール地域の全住民の間で一般的であり、実際に男女ともに喫煙し、子供でさえも小さいうちに習慣となる機会が与えられている。……喫煙習慣はたかだかおよそ 250 年前

に始まったといえる。(p. 721)

煙草は朝鮮から満州にもたらされたが、朝鮮へは日本からもたらされたのである。そして日本へは、17世紀の初めにポルトガル人によって持ち込まれていたのである。(p. 722)

ゴルジ：17世紀のロシア軍の遠征以前に、ゴルジ〔ナナイ〕は満州から煙草とその栽培法を手に入れていたことは疑うことができないのである。……我々はアムール右岸の Da 村でゴルジが煙草を栽培しているのを最初にみた。……

オロチ：ゴルジと同じくウスリー川上流と流域に住むオロチもまた同じ方法で煙草を入手していた。さらにアムール下流のほかの住民であるゴルジや満州やアムール川、スングリ川の中国人と接触しているオロチャ、サマギル、ネグダ、ギリャークも同様に17世紀の段階で煙草を手に入れていたに違いない。彼らの地域では気候上のことなどから、煙草は栽培できなかったであろう。最後に、大陸のギリャークやオロチを通じて、煙草は彼らの同胞のサハリンのギリャーク、オロッコに達したのである。ところが、その島の第3の住民であるアイヌは、たぶん煙草を別のところから入手していたであろう。つまり日本人から直接にである。(p. 724)

煙草と同様に、ギリャークやアムール地方のほかの住民たちはパイプの形態をしたものを満州から手に入れていた（ギリャーク語で tai という）。それはまた中国のいたるところに広がっているが、二つの金属部が薄い黒色の木部で連結している。下部は弓形で小型の鉢形の頭部に入りこみ、上部もしくは吸口はふつうの人用のものは真鍮製である。裕福なギリャークは中国人をまねる努力をし、硬玉もしくは玉髓、紅玉髓、軟玉のような石製の吸口の自分のパイプを入手している。それらはスングリ地方で作られており、とくにチチハルやほかの場所で作られる。アムール地方の全住民の間で、パイプの形態において大きな一致がみられ、その部分品はいつもスングリ地方からのもので構成されている。そこではそれらが工場生産されている。サハリンアイヌだけは、別の形態のパイプをもっているが、その理由は別源から入手しているからである。つまり日本人からである。私は彼らの二つの形態のパイプをみた。一つはひじょうに小型の頭部をもち、その頂部を四角に切りそろえており、小さな指の先端にかろうじてフィットするものである。そして別の一つは、大型で鉢形の頭部をもつものである。……彼らはまた彼ら自身のパイプの頭部を製作している。それはノリウツギの木で作られており、とくに女性によって使用されている。(p. 725-726)

ギリャークは喫煙の楽しみを他人と共有するのが好きである。けれども炉のまわりに座る人あるいは屋外のたき火のまわりにいる人すべてにパイプを回すことは決してなされない。このことは小型サイズのパイプではまったく禁止されている。また加えて、社会上のあるいはモラル上の違いが通常存在することで。しかし一般には、並んでいる二人の間ではパイプのやりとりはみられる。とくに、もし新米者が家に現われると、その主人は自分の横に席を設けた後、新しく火をつけたパイプを客に手渡す。客はひとふかしした後で主人に返す。主人はそれを受取り、終るまで喫煙する。今度は、客が同じ方法で主人にお返しをする。このことはいつも友

情を示す歓迎と良き理解あるいはある評価と対等な間柄の一つのサインである。(p. 727)

アムールの人々の間では、少なくとも下流域では嗅ぎ煙草や噛み煙草はみられない。(p. 728)

以上、ここで表現されたパイプは煙管とおき変えて読んでよいものである。そしてその喫煙習慣の中に、来客へのもてなしとして、ニヴヒの間でも「煙管受取り渡しの儀礼」が観察されているのである。

これとは別の内容の「煙管受取り渡しの儀礼」もみられる。それは S. Ya. シュテルンベルグが収集した民俗資料で、ニヴヒの英雄説話の中に認められるものである(荻原 1989 a)。すなわち、男女間で「同じキセルで喫煙しようという申込みは特別に親密な関係を象徴的に示す。その申込みを女性が拒絶することは、すなわち、求婚を拒むことになる。食事を共にすることもまた結婚の同意を表わす」(p. 236)とされる。ほかの諸族に関してこの種の説話については、今は調べる余裕をもたないので課題として残しておこう。

9-4 北方ツングースにみられる儀礼

ところで、このような新来者の歓迎のひとつの表現として、同様の儀礼が極東地域の北方ツングースの間でも認められることが S. M. シロコゴロフによって報告されている(川久保・田中訳 1941)。

ツングース族は、Orochon, Samagir, Mergen Tungus, Khingan Tungus, Birar Orochon, Reindeer Tungus of Manchuria, Amur Reindeer Tungus そのほかの数多くの「諸群団」を包括した旧名称である。現在は Evenk エヴェンクあるいは Evenki エヴェンキと称されている。そして次のように喫煙儀礼が記録されている。

歓迎を表はす慣習の中、最も重要なものは喫煙の慣習である。その人が同一氏族に属し、しかも年長である場合は、主人に煙管を渡して煙草を詰めて貰ひ、火をつけて返して貰ふ。それから客は主人の煙管を寄越せといひ、煙草をつめ火を的けてから返してやる。立去る時には目上の者は自分の煙管で別れの儀式に居合せた人すべてに煙草をのんで貰ふ。興安ツングース [Khingan Tungus=興安嶺ツングース=自称オロチョン] に於いては、目下の者(男子)は目上の者を迎へるときには跪いて迎へ、他の諸群団に於いては膝を深く曲げて迎へる。クマルチェン [庫瑪爾鄂倫春=クマルジオロチョン] に於いては、人を迎へる際には婦人は右手を額にもって行って深い御辞儀をする。満州の凡てのツングースに於いては、男子は膝を深く曲げる。客が主人より年下であれば、先づ主人の煙管をよこすやうに請はねばならない。馴鹿ツングースに於いては、これらの慣習は満州のツングースに於けるほど発達してゐない⁽⁴⁾。一般的にいへば、出合に関する諸慣習は、実行に際し非常に正確であることを要する。礼儀正しくあらうとすれば、歓びや驚きの表現をしてはならない。(翻訳 pp. 637-638)

さらに引用文中の註(4) では、以下のようにいわれる。「これらの風習は勿論近來の風習であつて、喫煙とともに蒙古人によってツングースに輸入されたものである。ツングースの他の群団に於

けるこれらの慣習についての、正しい記録があれば甚だ興味があることだらう。といふのは、煙草のツングースへの輸入に関する近似的史料が知られてゐるからであつて、ツングースの或者は煙草を多分露西亜人から輸入したのである。この複合は近代的交通機関の輸入以前の、二三の慣習の伝播の速さについての観念を与へるものであらう。」（同p. 643）とされる。さらにまた別のところで「飲酒と喫煙との風習は幼年時代から行はれ、子供は通例10歳までに全く常習的に喫煙するやうになる。」（同p. 554）とも指摘されている。

以上、管見ではあるが、北方地域における新来者（客）と主人との間での歓迎の意の表現のひとつとしての「煙管受取り渡しの儀礼」をいくつかみてきた。北海道アイヌ、サハリンアイヌ、ニヴヒ、エヴェンキなどの間で類例を確認することができたわけである。エヴェンキにおける場合は、シロコゴロフはこの種の儀礼が蒙古人によって輸入されたと述べているが、アムール川下流ならびにサハリン住民への煙管や煙草の伝播ルートが、シュレンクのいうように満州方面からであつたという意見に従えば、この儀礼もまた同じルートと考えなければならないであろう。交易に関する問題ともからんでくるところである。

ではここで、喫煙儀礼ではないが、興味深いシャーマンと煙草に関する記録をみておく。

たとえばチュクチに関しては、前出のW. ボゴラスの研究にみられるところであるが、鳥居龍蔵が紹介している（鳥居 1926, 再録：202-203）。

シャーマン巫人は常に祈り、又、祭式の時にその運動・動作を自由ならしむるために、毛の襦衣を脱ぎ、腰のあたりまで裸になる。又靴を脱ぎすて、足の自由を得るようにする。シャーマンの祭式の時は、最も精神が昂奮して、身体の動作が非常な活動を現すのであるから、衣服を脱ぎ、靴をぬぐのはもっともなことである。要するにシャーマンは跳神・乱舞の君である。けれども話を聞いて見ると、昔はシャーマンは刺激とか乱舞などは行われず、実に静かであつた。けれども彼らは、他の草の混ざらない刺激の最も強い煙草を大きな煙管に一杯について盛んに喫んで、この煙草の強い麻酔剤によってシャーマンの祭式をしたものである。こういう風習は元はなかったので、古くツングースのシャーマンの方の風習がうつって来たものと思われる。〔下線は宇田川〕

また、ヤクートについての記事については、V. L. セロシェフスキーの研究をもとにした加藤九祚の紹介がある（加藤 1986：116-117）。それは病気を治すために患者のところに招かれたシャーマンである。

……シャーマンは、住居の柱と柱の間につくられた板床の上座を占めた。……ゆっくりと上衣を脱ぎ、シャーマンの衣裳を着る。それから彼は、自分にあたえられた煙管（タバコをつめ、火がついている）を受け取って吸い、激しいしゃっくりをして身をふるわせる。タバコを吸い終えた頃、彼の顔は青ざめ、頭をたれ、目は半眼となる。……〔下線は宇田川〕

このようにシャーマンは、「煙草」という媒介物を通してある種の神がかり状態になるのである。

前にみておいたナナイの煙草・煙管を紹介した N. A. ロパーチンが“煙草”を「麻醉性のもの」としていることもこれに関係するのであろう。また、チュクチの場合はツングース方面の風習が伝播したらしいことがいわれていたが、荻原眞子によると「東アジアのシャマニズムの特徴は、ニヴフ族の場合、ツングース系諸族の場合、北東のパレオアジア諸族の場合で著しく異なっている。アイヌのシャマニズムについては資料も断片的であり、十分な議論がなされていないが、樺太アイヌのシャマンは隣接する諸族の影響をうけていたように思われる」（荻原 1989b : 123）とされている。ここでみたような“煙草”もシャマニズム研究のひとつの要素となる可能性があることを指摘しておきたい。

10 交易について

さて、以上に「煙管受取り渡しの儀礼」を中心とした煙管・煙草に関する儀礼・風習といったものをみてきたが、アムール川流域からサハリン、北海道といった一つのまとまりの中で共通するものが認められるとしてよいであろう。それは、煙管の考古資料・民族資料の各タイプの広がりともおおむね共通するといえるものである。とすると、煙管および喫煙習慣の当該地での流布の年代（およそ17世紀以降）とも関連して考えなければならないのは、いわゆる「山丹交易」との関係であろう。サンタンというのは、アムール下流域のウリチを指していることはすでに指摘されていることである（佐々木 1987 : 333, 児島 1989 : 35）。そして実際に商人としてサハリンにまでやってきたのは、ウリチのみならずナナイ、アムール・ギリャーク（スメレンクル）などでもあったとされている。ではこの山丹交易などの内容の一端を煙管・煙草などを通してみておくことにしたい。

『唐太雑記』（中村小市郎、1801・享和元年紀行）

一 満州より山丹え交易に持来候品

十徳 反物 木綿類品々 酒 煙草 きせる 玉 鍋 粟 稗 大豆 小豆 其外家財の品々、唐太運上屋のごとく何にても持来と云。（高倉新一郎編『犀川会資料』北海道出版企画センター、1982 : 616）

一 山丹人ラリカタえ来リヲロコ人との交易は、十徳・錦類・鍋・煙草等を相与ひ、ヲロコ人より獣の皮類受取候よし。（同上 : 635-636）

一 ヲロコ人は迄クシュンコタン番小屋迄来候もの

……山丹渡の十徳・錦・其外油類積来、直に右番小屋へ差出致ニ交易一、代り物は米・麴・煙草等持帰候由。……（同上 : 643）

『休明光記附録（巻之七）』（中村小市郎・高橋次太夫、1801・享和元年）

九、唐太嶋見分仕候左ニ奉申上候

山靱夷の内にも……ヲムシャに出候ものも御座候趣ニ候得ども、毎年満州より両度程ヅ、船四五艘に錦段切、古着木綿、玉類、きせる、煙草、麦、粟其外日用の品等迄積入、マンコ〔黒龍江〕川筋キンチマ〔キジ〕と申所迄相下、同所にて山靱夷と交易致候ニ付、……（『新

撰北海道史—第5巻史料1—』北海道庁, 1937: 818—819)

『北夷分界余話(巻之五)』(間宮林蔵述・村上貞助編, 1811・文化8年)

一 此島〔サハリン〕の夷は我シラヌシに来て諸物を交易し、又サントン・ヲロッコ・スメレ
ングルの諸夷と交易して其生産をなす事なれば、是島夷の専務となす処なり。凡シラヌシに
来る者、東はフヌップ、西はナヨロの辺りを限りとすべし。是終歳中往来して漁獵をなし、
又交易をなす者なり。是より奥地の夷は只交易のみを事として、一歳の中一、兩度往来す。
其交易する処のもの、我わたす処は諸獸皮・米・酒・木綿・烟草・斧・針・釘・鍋の類を以
てす。島夷は山丹舟より来る処の錦・玉・煙管其他鷲羽・トナリ〔獸皮を以て製し繩にかへ
用ゆる物〕の類を持来て交易す。……

一 此島の夷、山靱夷と交易する事は終歳なす処也。然も島夷、サントンに至るにあらず、山
丹夷来て交易するなり。島夷のわたす処の者〔物〕は、シラヌシより易かへりたる又はみづ
から獵し獲たる獸皮或は斧・小刀の類を以て、山丹夷賣し来る処の木綿・錦・玉・煙管・煙
草・針の類に交易す。(洞富雄・谷沢尚一編注『東靱地方紀行他』平凡社, 1988: 59-60)

『北夷談(第三)』(松田伝十郎, 1822・文政5年)

此島の夷〔サハリンアイヌ〕山靱夷ともにソウヤに渡来して、錦の切れ、青玉、きせる杯種
々持渡で、獺、狐、狸の皮と交易せしと云。……(大友喜作編『北門叢書』5, 北光書房,
1944: 176)

『唐太話』(三保喜佐衛門談・布施虎之助註, 1842・天保13年)

評伝・三国通覧にカラフトより蝦夷へ交易する産物に、青玉、鷲羽〔ワシの羽〕、煙管、蟒
純繪綺〔いわゆる蝦夷錦〕等あり。其内青玉はカラフトの産なり。鷲羽はカラフト及蝦夷の産
也。……

錦帛様々の縫織もの、さらさ染やうのもの、陶器、煙管などの類、唐山、靱靱、満州あたりの
産にして多くはサントンの夷人等唐太へ持渡りしもの也。(高倉新一郎編『日本庶民生活史
料集成』4, 三一書房, 1969: 206)

『北海随筆』(坂倉源次郎, 1739・元文4年)

一、我邦〔本州〕より蝦夷え渡す物

米(八升を一俵と定) 酒(二斗を一樽と定) 糒 塩 糸 出刃 針 煙草 古手 染木
綿 きせる 大略右の類なり、(高倉新一郎編『日本庶民生活史料集成』4, 三一書房,
1969: 404)

今、手持ちの史料をみただけでもこのような記録がみられるが、以上の流通関係をまとめてみる
と次のようになる。

満州→山丹人	煙草・煙管
満州→サハリン	煙草・煙管
山丹人→ウィルタ	煙草

北方地域の煙管と喫煙儀礼

山丹人→サハリンアイヌ 煙草・煙管

サハリンアイヌ→奥地夷（ウィルタもしくはニヴヒ） 煙草

サハリンアイヌ→ウィルタ 煙草

サハリンアイヌ→宗谷アイヌ 煙管

本州→北海道アイヌ 煙草・煙管

これをみると、たとえばサハリンアイヌに煙草や煙管が伝わるルートは満州あるいは山丹人を通じてという一つの道が存在する。北海道アイヌからサハリンアイヌへという道は示されていないが、本州から北海道へというルートが認められることから、そのルートも十分に想定できるところである。現実にはサハリンアイヌの民族資料の中には、O. Baba の指摘にもあったように、「典型的な中国の煙管」と「典型的な日本の煙管」の両方が認められている。

では次に、交易品としての煙草あるいは煙管の価格などを調べておこう。この研究は高倉新一郎が詳細におこなっている（高倉 1939）。

まず数量的には、氏の作成した山丹交易表から抜粋すると、煙管に関しては、1853（嘉永6）年：10本、1858（安政5）年：1本、1860（万延元）年：9本といった程度である。

価格について抜粋してみると以下のようなになる。

1789（寛政元）年	煙管1本	8升入米1俵以下
1790（寛政2）年	煙管	獺皮3枚
1791（寛政3）年	煙管	獺皮3枚あるいは貂皮10枚位
1801（享和元）年	煙管	獺皮1枚
1802（享和2）年	煙管1本	獺皮1枚〔貂皮では3枚ほどか〕
1809（文化6）年	煙管	獺皮 $\frac{1}{2}$ 枚
1812（文化9）年	煙管1本	樺太産貂皮1枚〔蝦夷産獺皮で $\frac{1}{2}$ 枚〕 本州産煙草1把

このように、年代によってばらつきはあるが、「文化9年〔1812〕白主に於て、山丹と我国の直接交易が開始されるや、一定の価格が決められ」とされる（p.188）。ちなみに、サハリンにおける酒の価格は1升につき243文とされる。貂皮1枚は121文5分、煙管1本は文化9年以降は貂皮1枚程度である。現在の価格に換算すると、仮に清酒1升の価格を1,500円とすると、貂皮1枚は約750円となり、煙管も同じ750円ほどの価格となる。もちろん、それ以前の交換比率は文化6年を除いてももっと高価であり、貂皮3枚とするとおよそ2,250円、貂皮10枚とすると7,500円となる。米8升の場合は10kg 5,000円の米としておよそ6,000円となる。煙管はかなり高価なものであったが、19世紀に入って比較的安値になったといえることができる。

ちなみに、『蝦夷地一件』（松前左膳、1790年）によれば、米8升入1俵について煙草は4把、煙管は5本とある。『東行漫筆』（荒井保恵、1809年）の場合は、きせる4本が玄米8升到に代えられる品とされている。また『夷諺俗話』（串原正峯、1791年）では、同じく米8升入り1俵につき煙

草は3把、煙管は3本とある。およそ6,000円で煙管3～5本交換できたということになる。場所によって変動がみられることがわかる。

つい最近、海保嶺夫の研究が発表されている。それは『北蝦夷地御引渡目録』（1855年）の紹介と分析である（海保 1991）。それによると北蝦夷地すなわちサハリンのアイヌの「煙管（鋤）と火打が、松前藩からの輸出品ではなく山丹品として購入されていることが注目される。北海道のアイヌ民族は両者を和人から入手しており、両者はアイヌ社会に北と南の両ルートから流入したことが知られる」とある。また分析を通して、1853（嘉永6）年当時の交易の平均価格は煙管1本が貂皮1.1枚とされている。樺太産貂皮と考えてよいので、前の1812（文化9）年の価格とほぼ同じである。ここにも白土会所の果たした役割を認めることができる。

結びにかえて

馬場脩は述べている。「慶長10年〔1605年〕始めて煙草の種子が本邦に伝来されて、これを長崎で栽培し、これが始めて全国へ伝播しだしたと言ふ史実が確実なものだとすれば、アイヌ人間には煙草栽培後38年後〔1643年、M. G. フリースの記事〕にして彼等の最北の地樺太の奥地の北知床半島辺のアイヌ迄にも及んでゐたのであるし、亦煙草が既に当時の日本商船の蝦夷貿易品の重要な物の一つとなって登場してゐたのである。アイヌ間への喫煙の風習の伝播が、如何に迅速であったかに、一驚せざるを得ないのである。」（馬場 1942：31）と。まさにその伝播の速さは驚くべきものである。そしてアイヌほかの北方諸族の間で、「煙管受取り渡し儀礼」のような精神的な儀礼行為をほぼ確立しているのも注目すべき点である。

前に「アイヌの軽石製火皿の文化史的な位置づけ」という小論で、軽石製火皿が喫煙習慣あるいは煙管とも関連する事実に触れておいた。それはオホーツク海、ベーリング海、アラスカ方面の海獣狩猟民文化の石ランプとも関係して位置づけることができるが、北海道のアイヌ文化にいたって機能的変革がなされ、特殊なものとして存在することを指摘しておいた。その機能的変革の一つの役割を果たしたのが喫煙習慣であったのであろう。そのような意味で、煙管に関する考古資料・民族資料の検討はアイヌ文化の一側面を物語る材料を提供することになると考える次第である。

なお、半田昌之は古代メソアメリカの“たばこ文化”について論考している（半田 1985）。その中で、パイプの形式分類を行い、かつパイプの伝播ルートについて述べている。「16世紀、新大陸から旧大陸にたばこが伝わった中で、パイプは、北米からイギリスへ渡ったといわれている。しかし、北米における古代のパイプは石製が主流だったのに対し……イギリスで初期に作られたパイプは、土製のクレーパーパイプ……であった。一方、中米のパイプの材質は土器がほとんどで、形態的にもクレーパーパイプと類似したものも見られる点……などから、パイプがヨーロッパに渡ったルートについても、見直してみる必要があるように思う」と。このような材質の問題と形式の研究にとって役立つところがあれば幸いである。

文 献

- 旭川郷土博物館編 1973 『市立旭川郷土博物館所蔵品目録』Ⅲ, 市立旭川郷土博物館
- 馬場 脩 1936 「北千島占守島の第二回考古学的調査報告」『人類学雑誌』51-3
- 馬場 脩 1940 「樺太の考古学的概観」『人類学・先史学講座』17
- 馬場 脩 1942 「日本北端地域のアイヌと煙草」『古代文化』13-11
- ベルグ, L. S. (小場有米訳) 1982 『カムチャッカ発見とベーリング探検』原書房
- ビーハン, A. (本田弥太郎・伊藤浩夫訳) 1944 『外郭アジアの民族と文化』彰考書院
- 美幌町郷土資料館編 1983 『美幌町郷土資料館収蔵品目録』1
- 知里真志保 1944 「樺太アイヌの説話 (1)」『樺太庁博物館彙報』3-1 (『知里真志保著作集』1, 平凡社, 1973: 251-372所収)
- 知里真志保 1953 『分類アイヌ語辞典 (第1巻植物篇)』日本常民文化研究所
- 函館博物館編 1987 『児玉コレクション目録』Ⅱ, 函館博物館
- 半田 昌之 1985 「古代メソアメリカのたばこ文化」『たばこと塩の博物館研究紀要』1
- 林 善茂 1965 「アイヌの食生活」『北方文化研究報告』20
- 洞 富雄・谷沢 尚一編注 1988 『東韃地方紀行他』東洋文庫484, 平凡社
- 池上 二郎 1982 『ウイルトの暮らしと民具』ウイルト民俗文化財緊急調査報告書4
- 海保 嶺夫 1991 「『北蝦夷地御引渡目録』について—嘉永6年(1853)の山丹交易—」『1990年度北の歴史・文化交流研究事業中間報告』北海道開拓記念館
- 加藤 九祚 1986 『北東アジア民族学史の研究』恒文社
- 木村 信六 1934 「本斗郡先史時代遺物発見地名表」『木村郷土研究所報』5
- 金田一京助 1937 「アイヌの生活と民俗, 採訪随筆」人文書院 (『アイヌ文化誌』金田一京助選集Ⅱ, 三省堂, 1961所収)
- 金田一京助・杉山寿栄男 1942 『アイヌ芸術 (木工篇)』第一青年社
- 北構 保男 1983 『1643年アイヌ社会探訪記—フリース船隊航海記録—』雄山閣
- 小林 克 1991 「オランダからきたクレイパイプ」『甦る江戸』新人物往来社
- 古泉 弘 1985 a 「銅製品」『江戸—都立一橋高校地点発掘調査報告』都立一橋高校内遺跡調査団
- 古泉 弘 1985 b 「江戸の街の出土遺物」『季刊考古学』13
- 児島 恭子 1989 「18, 19世紀におけるカラフトの住民」『民族接触』六興出版
- 河野 広道 1961 「アイヌの石煙管」『ウタリ』3-12
- 久保寺逸彦 1970 「挨拶・礼儀・作法」『アイヌ民族誌』第一法規出版株式会社
- クライナー・ヨーゼフ 1988 「ヨーロッパにおけるアイヌ文化研究史とアイヌ観の移りかわりについての考察」『北海道を探索』17, 北海道みんぞく文化研究会
- 松谷 純一 1986 『重兵衛沢2遺跡』礼文町教育委員会
- モース, E. S. (石川欣一訳) 1971 『日本その日その日3』東洋文庫179, 平凡社
- 名取 武光 1942 「アイヌ民族の精神生活」『北海道文化史考』日本放送出版協会
- 新岡 武彦 1941 『樺太発見の所謂大陸的遺物の二, 三に就きて』樺太庁土木課 (『樺太・北海道の古文化』2, 北海道出版企画センター, 1977: 90-101所収)
- 新岡 武彦 1966 「南樺太遠淵湖畔二号沢遺跡」『北海道考古学』2
- 新岡 武彦 1974 「サハリン南東部湖沼地帯遺跡ガイド」『河野広道博士没後二十年論文集』北海道出版企画センター
- 荻原 眞子 1989 a 「ニヴヒ族の英雄説話」『民族接触』六興出版
- 荻原 眞子 1989 b 「民族と文化の系譜」『東北アジアの民族と歴史 (民族の世界史3)』山川出版社

- 大野延太郎 1899 「北海道旅行中の見聞記」『東京人類学会雑誌』15-164
- 大友 喜作編 1944 『北夷談・北蝦夷図説・東蝦夷夜話』北門叢書 5, 北光書房
- 犀川会編 1933 『北海道原始文化聚英』民族工芸研究会
- 崔 福来・辛 建 1989 「黒龍江省齊齊哈爾市梅里斯音欽清代墓群調査簡報」『北方文物』1989-4
- 佐々木史郎 1987 「ピウスツキ資料に基づく北サハリンにおける民族関係の研究」『国立民族学博物館研究報告』別冊 5
- 更科 源蔵 1982 『アイヌの民俗』(上), みやま書房
- 妹尾 守雄訳 1979 「蝦夷および樺太における種族」『シーボルト「日本」』第 6 巻, 雄松堂書店
- 関 秀志 1990 「松浦武四郎とモース」『松浦武四郎研究会会誌』10
- 史 学謙・金 太順 1982 「依蘭県永和徳豊清墓の発掘」『黒龍江文物叢刊』1982-1
- 白老民族文化伝承保存財団編 1989 『児玉資料目録』I, アイヌ民族博物館
- シュービン, V. O. 1990 「千島列島における18—19世紀のロシア人集落」『北海道考古学』26
- シロコゴロフ, S. M. (川久保悌郎・田中克己訳) 1941 『北方ツングースの社会構成』岩波書店
- 代田亀次郎 1890 「北海道北見国礼文郡(レブン・モ・シリ)ニ於テ発掘セル土器石器等」『東京人類学会雑誌』5-51
- 大坊 善章 1926 「樺太本斗郡遺跡」『人類学雑誌』41-5
- 高倉新一郎 1939 「近世に於ける樺太を中心とした日滿交易」『北方文化研究報告』1
- 高倉新一郎 1966 「蝦夷風俗画について」『アイヌ研究』北海道大学生協同組合
- 高倉新一郎編 1969 『日本庶民生活史料集成』4, 三一書房
- 鳥居 龍蔵 1926 『極東民族』文化生活研究会(『鳥居龍蔵全集』7, 朝日新聞社, 1976所収)
- ウイлта協会資料館運営委員会編 1980 『資料館ジャッカ・ドフニ展示作品集』ウイлта協会
- 宇田川 洋 1979 「アイヌの軽石製火皿の文化史的位置づけ」『物質文化』33
- 宇田川 洋校註 1983 『河野常吉ノート—考古篇 2—』北海道出版企画センター
- 山本 祐弘 1970 『樺太アイヌ・住居と民具』相模書房
- 渡辺 仁ほか 1986 『昭和60年度アイヌ民俗文化財調査報告書』北海道教育委員会
- АСЕЕВ, И. В. 1974 Археология западного побережья Байкала и проблемы этногенеза кочевников Прибайкалья. Известия Сибирского Отделения АН СССР 11-3.
- BABA, O. 1949 Smoking among the Ainu. Man vol. 49, London. (『樺太・千島考古・民族誌』1, 北海道出版企画センター, 1979: 225-234所収)
- BOGORAS, W. 1904 The Chukchee. Memoirs of the American Museum Natural History Vol. XI.
- ВДОВИН, И. С. 1973 Очерки Этноческой Истории Коряков. Ленинград.
- ДЬЯКОНОВА, В. П. 1975 Погребальный обряд Тувинцев как Историко-Этнографический Источник. Ленинград.
- ГОЛУБЕВ, В. А. 1973 Археологические памятники Сахалинской области. Ю-Сахалинск.
- НИТЧСОК, R. 1892 The Ainos of Yezo, Japan. Smithsonian Inst.. (R・ヒッチコック, 北構保男訳 1985 『アイヌ人とその文化』六興出版)
- ИВАНОВ, С. Б. 1963 Орнамент Народов Сибири как исторический источник: по материалам XIX-начала XX в.). М. -Л..
- LANDOR, A. H. S. 1893 Alone with the Hairy Ainu. London. (A・H・S・ランドー, 戸田祐子訳 1985 『エゾ地一周ひとり旅』未来社)
- ЛАТЫШЕВ, В. М., ПРОКОФЬЕВ, М. М. 1988 Каталог этнографических коллекций Б. О. Пилсудского в Сахалинском Областном Краеведческом Музее. Ю-Сахалинск.
- ЛЕВИН, М. Г., ПОТАПОВ, Л. П. (ред.) 1956 Народы Сибири. Народы Мира. Москва.
- ЛОПАТИН, И. А. 1922 Гольды: Амурские, Уссурийские и Сунгарийские. Владивосток.

北方地域の煙管と喫煙儀礼

- МЕДВЕДЕВ, В. Е. 1979 К вопросу о погребальных обрядах Нанайцев. Древние Культуры Сибири и Тихоокеанского Бассейна. Новосибирск.
- МОЛОДИН, Б. И. 1979 Кыштовский Могильник. Новосибирск.
- PILSUDSKI, B. 1912 Materials for the study of the Ainu language and folklore. Krakow.
- SCHRENCK, L. 1856 The Peoples of the Amur Region (Die Völker des Amur-Landes). Vol. III. (HRAF. 1964)
- СТЕШЕНКО, Т. Б. 1979 Раскопки на поселении Найбучи I. Археология Амуро-Сахалинского Региона. Владивосток.
- ШУБИН, В. О. 1979 Раскопки многослойного поселения Озерск I. Археология Амуро-Сахалинского Региона. Владивосток.

追記：本論図9-8に木製の二又キセルを示しておいたが、日本においても「夫婦キセル」あるいは「比翼キセル」という、一つの雁首から2本の管が分かれ、二人が同時に煙草を吸える形態のものがあったという。

たばこと塩の博物館解説資料によると、「むかしから、たばこのつけざし、または吸い付けたばことといって、仲の良い人の間で、親しみをあらわす意味から、キセルと吸いかけのたばこをやりとりする風習があった。起源は、南蛮人がクレーパイプを持参した当時、来客へ自分のパイプの吸口を折って、相手にすすめる儀礼的な作法からはじまったらしい」とある。さらに、キセルは男女の仲を取り持つ道具でもあり、それがこの夫婦キセルを生み出したともいわれる。このアイデアは長崎丸山の遊女であるという。

Pipes (*kiseru*) and smoking etiquette in Hokkaido and surrounding regions

Hiroshi UTAGAWA

*

In this paper I consider the archaeological and ethnological pipes that are spread over Hokkaido and the northern areas neighboring Hokkaido. O. BABA previously discussed this problem in 1942 and 1949. Here I plan to refer to the classification of the fundamental form of pipes, smoking etiquette, problems of trade and so on. The materials discussed here lay emphasis on stone and clay pipes on the grounds that these appear to be an older form compared with pipes made of metal.

*

At present as far as I know, only 4 examples of stone pipes are known from archaeological sites in Hokkaido (Fig. 2: 1~4). Nineteen examples, however, are known from sites on Sakhalin (Fig. 3:1, 2, 5 ~8, Fig. 4:2, 5). Six clay pipes were also found there (Fig. 3:9 ~12). Compared with Hokkaido, there are some differences in the types of raw material.

From sites in the Kurile Islands, one stone pipe (Fig. 5:1), one clay pipe (Fig. 5:3) and 2 bone pipes (Fig. 5:2, 5) are known. Only the stone pipe resembles the form of those from Hokkaido and Sakhalin. The other pipes made of clay and bone are like the so-called European pipes. In Siberia and China, a few stone and metal pipes have been excavated as shown in Fig. 6.

*

Next, I examined the ethnological materials. Amongst the Hokkaido Aynu, stone and wooden pipes such as those in Fig. 7 are described in the old records, *Tokachi Nisshi* and *Teshio Nisshi*, from the middle of the 19th century. Wooden pipes (Fig. 9:1, 2, 4 ~6, 8, Fig. 10:1, Fig. 11:1~7) and stone pipes (Fig. 9:3) are known until the first half of the 20th century. It is probable that the wooden pipes were mostly made from branches of *noriutsugi* (*Hydrangea paniculata* Sieb.).

Amongst the Sakhalin Aynu, stone pipes such as those in Fig. 12, Fig. 13:1, 2, 4, Fig. 14:i~k and the wooden pipes in Fig. 13:5, 6, Fig. 14:0 are known.

It is frequently said that wooden pipes were mostly used by Aynu women. O. BABA suggested that the stone and wooden pipes were made by the Aynu themselves. The Hokkaido and Sakhalin Aynu also had metal pipe bowls and mouthpieces with bamboo stems. These goods were all imported.

In Uilta (Orok), only one wooden pipe (Fig. 16-4) is known. It is recorded that the stone pipes shown in Fig. 16:1~3 were used by the Nivkhi (Gilyak). Wooden, stone and metal pipes were probably used by the Nanay. In the case of the Evenk (Orochon), there are the wooden and bone pipes shown in Fig. 18:1, 2.

A Koryak pipe made of antler is known (Fig. 18:3). Among the Yakut, wooden pipes with metal bowls were mostly used (Fig. 18:4, 5). Part of the stem is rolled leather. We may call this a special type. As shown in Fig. 19, many wooden pipes with bowls made of tin, pewter and ivory are known in the Chukchi. There is also a lot of carving of geometric designs at the stem in that area. Eskimo pipes are made of pewter and tusk (Fig. 20).

*

The four basic raw materials are classified in Fig. 22: "S" is stone; "C" is clay; "W" is wood; "M" is metal. A few other materials (eg. "B" made of bone) are known. Then I divided the fundamental form of pipes into eight basic classes, (1) with a low bowl; (2) slightly high bowl; (3) high bowl with a carved line under the bowl; (4) the bowl has a thick end on the stem side; (5) the bowl has a thin end on the stem side; (6) emphasized mouthpiece; (7) thin mouthpiece end; (8) flat plate base under the bowl. In Fig. 22 the upper part is archaeological material, while the lower is ethnological. A process of typological development is recognized as follows:

Type 1 → Type 2 → Type 3 → Type 4, 5 or 6, and Type 3 → Type 8.

Each type spreads as shown in Fig. 23 (Here also the upper part is archaeological material and the lower is ethnological).

*

Until recent times a smoking etiquette existed amongst northern peoples. Among the Hokkaido Aynu, the actions of receiving and handing the pipe, and filling up the tobacco, were known between the master of the house and visitors. It is said that the action of breathing the fire divided the god of fire between the host and the visitor. This traditional

custom was spread amongst the Sakhalin Aynu, the Nivkhi and the Evenk.

O. BABA (1949) explained the Sakhalin Aynu's custom as follows: "When an Ainu called on another Ainu, the master of the house customarily offered the visitor a smoke, by way of hospitable welcome. First of all, the master put tobacco into the bowl of a pipe. After he had had a smoke himself, he handed it very politely to the visitor by its front, with one hand on the bowl and the other on the mouthpiece, and the visitor took it from the master in the same very careful way."

*

It is probable that the custom of smoking in the northern regions including Hokkaido started in about the 17th century. This was linked with the so-called Santan Trade. In historical records from the middle of the 18th century to the middle of the 19th century, the circulation of tobacco and pipes was as follows: (1) from Manchuria to the Santan (Ul'chi or Nanay, Nivkhi), (2) from Manchuria to the Sakhalin Aynu, (3) from the Santan to the Sakhalin Aynu, (4) from the Sakhalin Aynu to the Uilta or Nivkhi, (5) from the Sakhalin Aynu to the Soya Aynu, (6) from Honshu to the Hokkaido Aynu.

The price of pipes as trading goods is also recorded. S. TAKAKURA noted that the price was established in 1812 A. D. at *Shiranushi* (Kril'on) situated near the south-western end of Sakhalin. The exchange value of one pipe was one Sakhalin marten.

References

- BABA, O. "Tobacco among Ancient Aino in the Extreme Northern Sections of Japan" *Kodai-Bunka*, Vol. 13, No. 11. Tokyo. 1942.
- BABA, O. "Smoking among the Ainu" *Man*, Vol. 49. London. 1949.
- TAKAKURA, S. "The trade between Japan and Manchuria with reference to Saghalien in recent times (mainly Tokugawa period)" *Hoppo-Bunka Kenkyu Hokoku*, No. 1. Sapporo. 1939.

Figure Captions

- Fig. 1 Names of pipe parts.
- Fig. 2 Stone pipes found in Hokkaido.
- Fig. 3 Stone and other pipes found in Sakhalin.
- Fig. 4 Stone pipes found in Sakhalin.
- Fig. 5 Pipes found in the Kurile Islands.
- Fig. 6 Stone and metal pipes found in Siberia.
- Fig. 7 Pipes of the Hokkaido Aynu.
- Fig. 8 An Hokkaido Aynu smoking.
- Fig. 9 Pipes of the Hokkaido Aynu and a man smoking.

北方地域の煙管と喫煙儀礼

- Fig. 10 Wooden pipe, pipe case and tobacco case of the Hokkaido Aynu.
- Fig. 11 Wooden pipes and others of the Hokkaido Aynu.
- Fig. 12 Stone pipe of the Sakhalin Aynu.
- Fig. 13 Pipes and others of the Sakhalin Aynu.
- Fig. 14 Pipes and wooden pillows containing pipes of the Sakhalin and Hokkaido Aynu.
- Fig. 15 Pipes and others published by E. S. MORSE.
- Fig. 16 Pipes of the Uilta and Nivkhi (4:Uilta, 1-3: Nivkhi).
- Fig. 17 A Nanay man smoking.
- Fig. 18 Orochon, Koryak and Yakut pipes (1,2:Orochon, 3:Koryak, 4-6: Yakut).
- Fig. 19 Chukchi pipes.
- Fig. 20 Eskimo pipes.
- Fig. 21 Pipes published in historical record ("*Hokusabunryaku*").
- Fig. 22 Fundamental forms of pipes.
- Fig. 23 Distribution map of each form of pipe.